

1. 流域の自然状況

1-1 河川・流域の概要

常呂川は、その源を北海道常呂郡置戸町三国山(標高 1,541m)に発し山間部を流下し、置戸町勝山において、仁居常呂川を合わせ置戸町、訓子府町を経て、北見市内において無加川を合わせ、北見盆地を貫流し、狭窄部を流下し仁頃川を合わせ、常呂平野を経てオホーツク海に注ぐ、幹川流路延長 120km、流域面積 1,930km²の一級河川である。

その流域は、北見市、訓子府町、置戸町の 1 市 2 町からなり、オホーツク圏における社会・経済・文化の基盤をなしている。流域の土地利用は、山林等が約 82%、農地が約 16%、宅地等の市街地が約 2%となっており、流域内は森林資源などに恵まれている。流域内には、オホーツク圏の拠点である北見市等があり、農業、水産業が盛んで、中下流部は農地として明治初期からひらけ、河口沿岸ではホタテの養殖などの漁業が行われており、タマネギや甜菜、ホタテの全国有数の産地となっている。また陸上交通として JR 石北本線、国道 39 号、国道 242 号、238 号、333 号等の基幹交通施設に加え、北海道横断自動車道が整備中であり、交通の要衝となっている。

また、国の天然記念物であるオジロワシ・オオワシが数多く確認されており、サケ、サクラマス、カラフトマス等が遡上するなど、豊かな自然環境に恵まれている。

このようなことから、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

流域の地質は、主に火山岩や火山砕屑岩からなる新第三系が分布する西部地域、白亜系や先白亜系が分布する中部地域、新第三系の非火山性堆積岩類が分布する東端部地域に分けられる。また、常呂川本流の中・下流域には、砂礫を主体とした第四紀更新世の段丘堆積物が分布し、特に北見盆地ではかなりの広範囲に認められ、河口付近には厚さ 2～3m の低位泥炭の分布が認められる。

流域の平均年間降水量は約 800mm であり、全国でもっとも降水量が少ない地域である。

三国山から置戸市街部に至る源流部は、河床勾配が約 1/30～1/150 の山間地を流れる溪流で、エゾマツ、トドマツ等の針葉樹林が広く分布し、フクドジョウ、エゾイワナ等が生息している。

置戸市街から無加川合流点に至る上流部は、河床勾配は約 1/150～1/300 であり、サケ、サクラマス、カラフトマス、シベリアヤツメ、ヤチウグイ等が生息し、サケの産卵床が数多く確認されている。鳥類ではオシドリ、オオジシギ等が生息している。河川周辺の山付林には、ハルニレ、ミズナラが比較的多くみられ、高水敷にはエゾノキヌヤナギやオノエヤナギを主体とするヤナギ群落や、クサヨシ、ヨシ等の群落が分布している。また、無加川合流点付近の中ノ島公園にはハルニレ大径木林があり、地域のシンボルになっている。

無加川合流点から仁頃川合流点付近に至るまでの中流部は、北見市街地を貫流し、河床勾配は約 1/300～1/600 の川幅が広く礫の中州や寄り州がみられる瀬・淵の明瞭な区間である。シベリアヤツメ、エゾウグイ等が生息し、サケの産卵床が点在する。また、オジロワシの営巣地やオオワシの越冬地が見られる他、忠志橋にはイワツバメの集団生息地が、端野橋の下流にはキクイモ群落見られる。河川空間は主に農地として利用され、広い畑地帯に調和した河川景観を形成している。北見市街に接するところでは香りゃんせ公園等の公園やグラウンドとして利用されている。

仁頃川合流点付近から河口に至るまでの下流部は、河床勾配は約 1/1,400～1/5,000 と緩やかで、低水路が大きく蛇行しており、ワンドや瀬・淵等多様な環境がみられ、魚類等の良好な

生息環境となっている。この区間上流は左右交互に山付き区間が現れる流れの緩やかな区間であり、所々に寄り州が見られるが、低水路は安定し、エソウグイ等が生息している。発達したハルニレ林等が山付き区間の所々に見られる。河岸にはオオイタドリ、クサヨシ等の草本や、エゾノキヌヤナギ等の木本が繁茂し、エゾメダカチビカワゴミムシが生息している。高水敷は広く畑地に利用されている。

区間下流の感潮域には、シラウオ等汽水域に生息する魚類の生息地になっている。河口にはエゾノコウボウムギやハマエンドウが見られ、左岸の砂丘地には、ハマニンニクやハマニガナが小群落を形成している。

河口部は蛇行が多く、人工池、河跡湖等の止水域も多く分布しているため、オジロワシやオオワシ等の採餌環境や渡り鳥の中継地、水鳥の集団分布地になっている。

常呂川の治水事業は、低平地の洪水氾濫を減少させるため、堤防と捷水路事業を中心に進められた。大正 10 年から北海道第 1 期拓殖計画の一環として、大正 8 年 9 月洪水にかんがみ、河口における計画高水流量を 5 万立法尺(約 1,400 m^3/s)として築堤工事に着手した。その後、昭和 2 年の第 2 期拓殖計画の実施にあたり、大正 11 年 8 月洪水をうけて、計画を再検討し河口における計画高水流量を 7 万 5 千立法尺(約 2,100 m^3/s)、北見地点における計画高水流量を 4 万立法尺(約 1,100 m^3/s)に改訂し、置戸町境野から河口までの区間において、築堤河道掘削等を実施した。その後、常呂川総体計画の立案にあたり、昭和 32 年に計画を見直し、北見における計画高水流量を約 1,100 m^3/s から 1,500 m^3/s にした。

その後、昭和 40 年の河川法施行を受け、昭和 43 年に北見地点で基本高水流量を 1,900 m^3/s 、計画高水流量を 1,600 m^3/s とし、300 m^3/s を洪水調節施設により調節する工事实施基本計画を策定し、河道の掘削、堤防の新築及び拡築、護岸設置等を実施してきた。

また、この計画に基づき、昭和 50 年に鹿ノ子ダムの建設に着手し、昭和 58 年に完成させた。

その後、河道掘削等を継続してきたが平成 4 年 9 月洪水や平成 13 年 9 月洪水等で大きな被害を受け、以後、現在まで築堤の完成化や河道掘削等を実施している。

常呂川水系最大の支川である無加川の治水事業は、昭和 22 年 9 月に本道を襲ったカスリン台風を契機として、昭和 28 年に改修に着手し、堤防の新築、河道の掘削、護岸設置等を実施している。

砂防事業については、上流の支川において北海道が昭和 39 年から砂防堰堤等を整備している。

河川環境の整備と保全については、上流の山林に囲まれた溪流河川や北見市街地の中の緑あふれる公園などといった自然環境を良好な状態で次世代に継承するため、その特徴ごとに柔軟な環境管理を行うための基本的な方針として河川環境管理基本計画を平成 2 年に策定した。

河川水の利用については、開拓農民による農業用水の利用に始まり、現在は約 6,600ha に及ぶ農地のかんがいに利用されている。また、工業用水や水道用水としても利用されている。過去 35 年間(昭和 45 年～平成 16 年)の北見地点における概ね 10 年に 1 回程度の規模の渇水流量は 4.83 m^3/s である。

水質については、BOD75%値は、概ね環境基準値程度で推移しているが、大腸菌群数は環境基準値を超えている。そのため、公共下水道事業および農業集落排水処理事業の整備促進、家畜排泄物対策の推進による流域内から供給される汚濁負荷の軽減、浄化ブロックや水生植物による水質浄化対策による河川内での汚濁負荷削減の取り組みが行われている。

河川の利用については、魅力的で活力溢れる地域づくりのため、沿川の自治体等が立案する地域計画との連携・調整を図り、地域住民に親しまれる河川整備を推進している。置戸や訓子府及び北見市街地で桜づつみ等が整備されており、周辺住民の憩いの場として親しまれている。北見市街地の高水敷には、ハーブ公園、パークゴルフ場やスポーツ広場が整備され、様々なイベントが開催されており、多くの市民に利用されている。

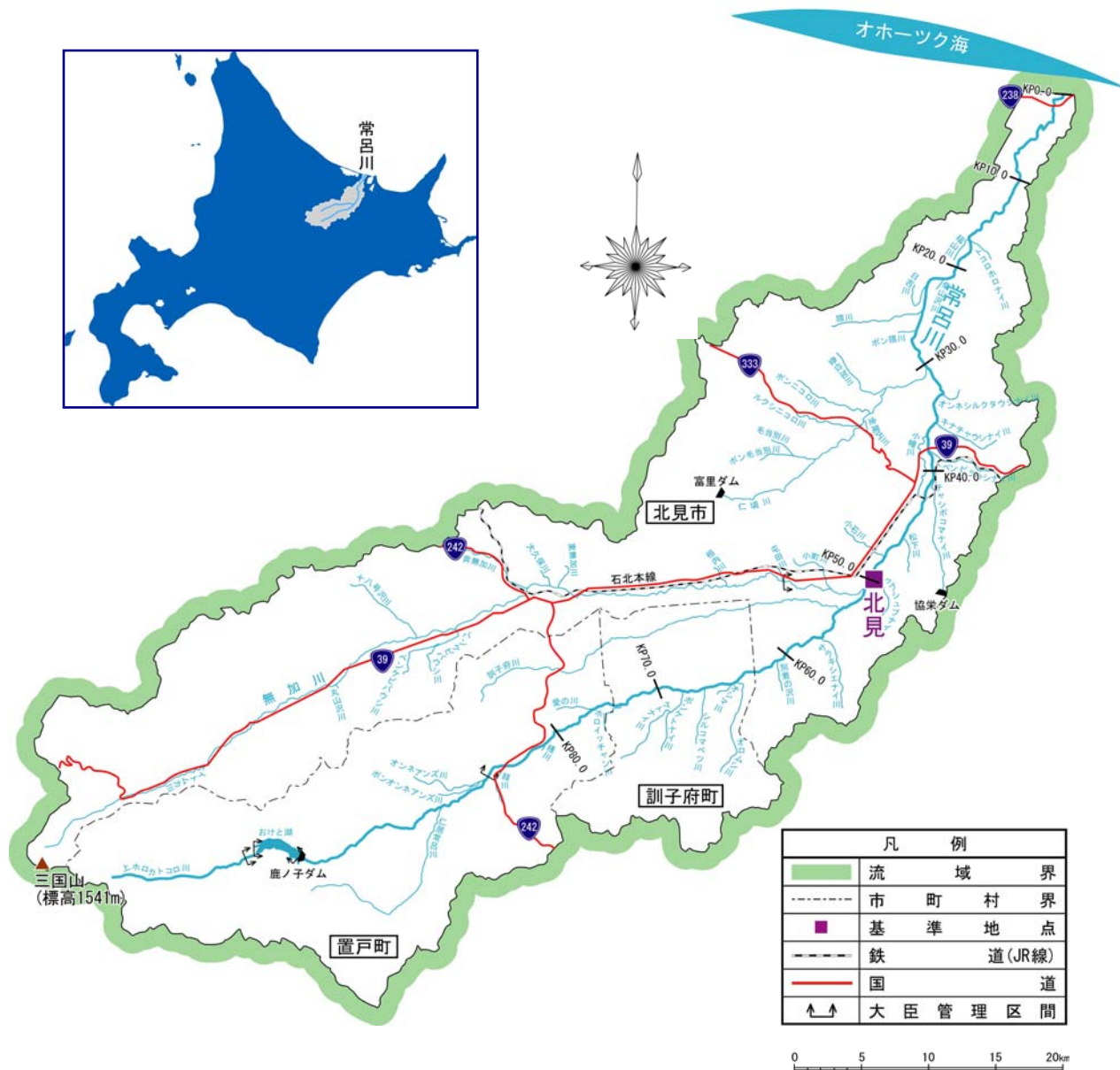


図 1-1 常呂川水系図

表 1-1 常呂川流域の概要

項目	諸元	備考
幹線流路延長	120 km	全国109水系内38位
流域面積	1,930 km ²	全国109水系内32位
流域自治体	北見市、訓子府町、置戸町	
関係市町村人口	約14.0万人	平成12年度河川現況調査

1-2 地形

常呂川は三国山(1,541m)に蟠基を發し北東に流れる常呂川流域の地形は、大きく山地、丘陵地、台地、低地の4種類に分類される。

山地は、主分水嶺をなす大雪山系の東端にあたる西部から南部地域の支湧別山地、置戸山地、北西地域、仁頃山地などがあり、広い範囲に分布している。流域西部の武華山(標高 1,759m)や三国山などを含む主分水嶺付近は、比較的急峻な大起伏山地であるが、地域全体としては小起伏が多い。

丘陵地は、北見台地と仁頃台地を分ける北見丘陵地や、サロマ湖と能取湖との間から北見盆地まで延びた常呂丘陵地、北見東方の北見台地と美幌台地を隔てる栄森丘陵地がある。台地は北見市を中心とする北見盆地が代表的なもので、常呂川本流や支流の無加川、訓子府川などにより数段の河岸段丘群が発達しており、網走地方における最大の内陸凹地となっている。

仁頃山地と北見丘陵地との間の仁頃川流域には仁頃台地があり、また、無加川上流には小規模に発達した段丘地形である温根湯台地がある。

低地は、サロマ湖の砂州および砂丘、三角州、扇状地を含む常呂低地のみで、常呂川河口付近に狭い範囲で分布する。

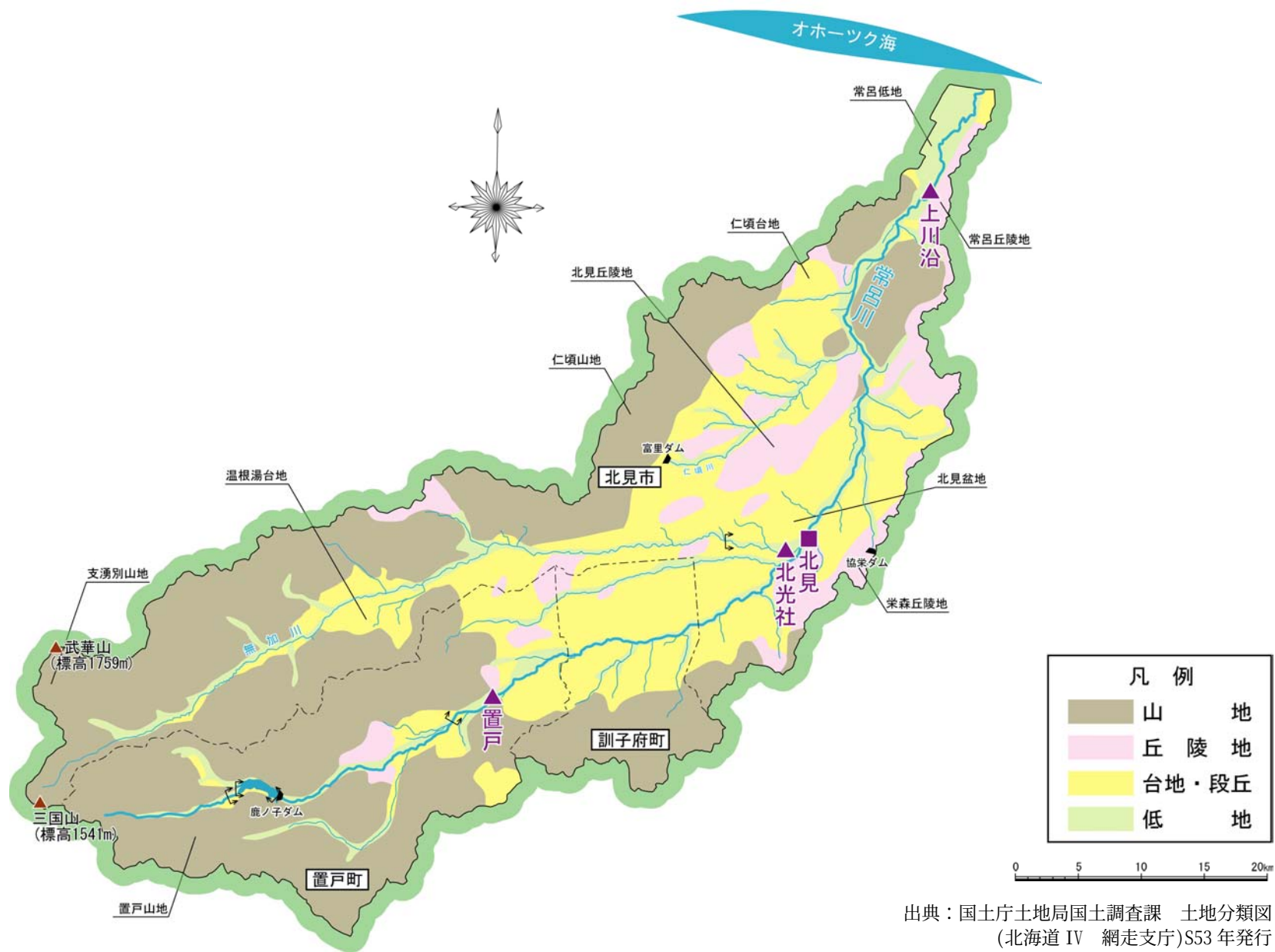


図 1-2 地形分類図

1-3 地質

常呂川流域は北海道北東部に分布する多様な地質から構成される。地質は主に火山岩や火山砕屑岩からなる新第三系が分布する西部地域、白亜系や先白亜系が分布する中部地域、新第三系の非火山性堆積岩類が分布する東端部地域に分けられる。

西部山地を主に構成するのは、新第三系中新統の安山岩類や凝灰岩類で、置戸を中心とした南部には鮮新統の安山岩類が認められる。これらの火山質岩類中には局部的に玄武岩溶岩、安山岩、流紋岩、閃緑岩などの小規模な岩脈も点在する。本川および無加川の最上流部は、第四紀更新世の熔結凝灰岩で覆われ、流域最高峰の武華山は更新世の安山岩溶岩からなる。また、断層に伴って基盤の先白亜系日高層群の粘板岩や砂岩の露出も確認されている。

仁頃山地を含む中部地域は、北見台地や仁頃台地を除けば先白亜系仁頃層群の分布地である。これは地質構造区分上、常呂帯の一部に相当し、同様な地質は南北方向に連結した分布が確認されている。仁頃層群は海底火山噴出物起源の玄武岩や玄武岩質凝灰岩、角礫岩を主体とし、レンズ状に石灰岩やチャートなどの小岩帯を伴っている。また、留辺蘂北方の山地には仁頃層群と断層で接して砂岩、頁岩からなる非火山性の白亜系湧別層群が分布している。

流域東端部の台地や丘陵地、仁頃川流域の仁頃台地には非火山性の新第三系中新統が分布する。これらは砂岩、頁岩を主体とし、礫岩を伴っている。また、北見市南東方栄森丘陵地の一部には礫岩、砂岩、混岩からなる古第三系陸別層が分布している。

常呂川本流の中・下流域や仁頃川流域には、砂礫を主体として第四紀更新統の段丘堆積物が分布し、時に北見盆地ではかなりの広範囲に認められる。沖積層は、河川の中・下流沿いに堆積する現河床氾濫原堆積物や、河口付近に狭い分布を示す三角州堆積物、扇状地堆積物、砂丘堆積物である。また、河口付近には厚さ 2～3m の低位泥炭の分布が認められる。

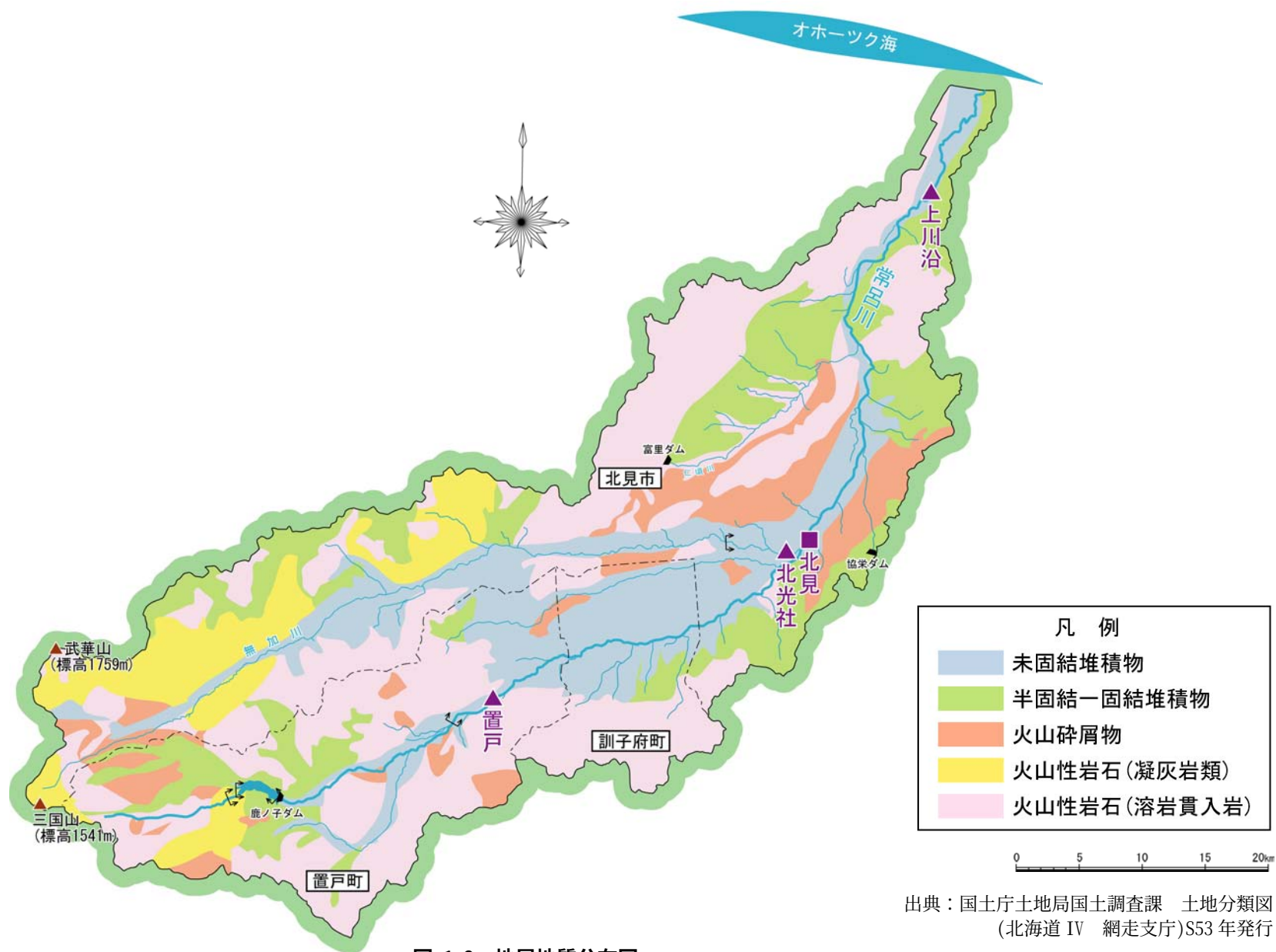


図 1-3 地層地質分布図

1-4 気象

オホーツク海気候に属すオホーツク沿岸は、梅雨や台風の影響を受けることが少なく、道内では温かな気候と伝えられる。

常呂川流域の気温は、他の道東地方の平均気温と同程度で北海道内の気温に比べて若干低く、夏期でも月平均 20℃前後と冷涼である。特徴として、5月から9月まではオホーツク海高気圧による低温を除いては比較的温和で真夏にはよく全道一の最高気温を記録する。また、秋冬にかけては雨量も少なく、晴天乾燥の日が多く続く。冬季は、北西の季節風と流氷の影響を受け、氷点下 20℃を越える日もある。

北海道の降水量は一般に日本海側に多く、次いで太平洋側、オホーツク海側の順に少なくなる。降水量の特に多いのは天塩から暑寒別に至る山系、支笏湖を中心とする西胆振、および道南の後志山岳地帯で、ともに年間 1,800mm 以上に達する。また、少ない地方はオホーツク海沿岸で年間 800mm 程度である。

網走地方の降雨型は、移動性低気圧による前線性の降雨が多く 8～9 月に集中しているが、低気圧の勢力が弱まっていることが多く豪雨になることは少ない。

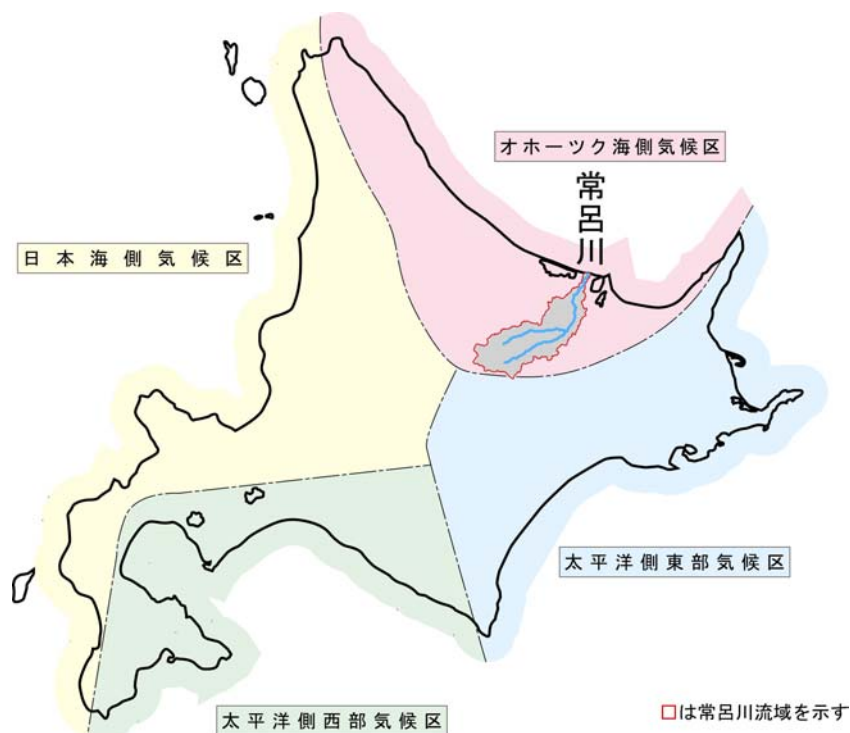


図 1-4 気候区分図

表 1-2 主な気象観測地

項目	上川沿地点 [常呂(気)観測所]	北見地点 [北見(気)観測所]	置戸地点 [境野(気)観測所]	留辺蘂地点 [留辺蘂(気)観測所]	北海道平均
データ期間	1978年～ 2004年	1976年～ 2004年	1978年～ 2004年	1978年～ 2004年	1977年～ 2004年
平均気温(℃)	5.8	5.8	5.0	4.7	7.4
平均最高気温(℃)	32.7	33.8	33.0	32.3	30.0
平均最低気温(℃)	-24.2	-24.0	-24.2	-23.2	-16.3
降水量(mm)	726.8	794.2	732.9	716.6	1034.0

※1 出典：気象庁アメダス

※2 降水量は、1985～2004年の20ヵ年平均データを使用した

※3 北海道平均の値は1977～2004年の各支庁所在地のデータを平均したもの

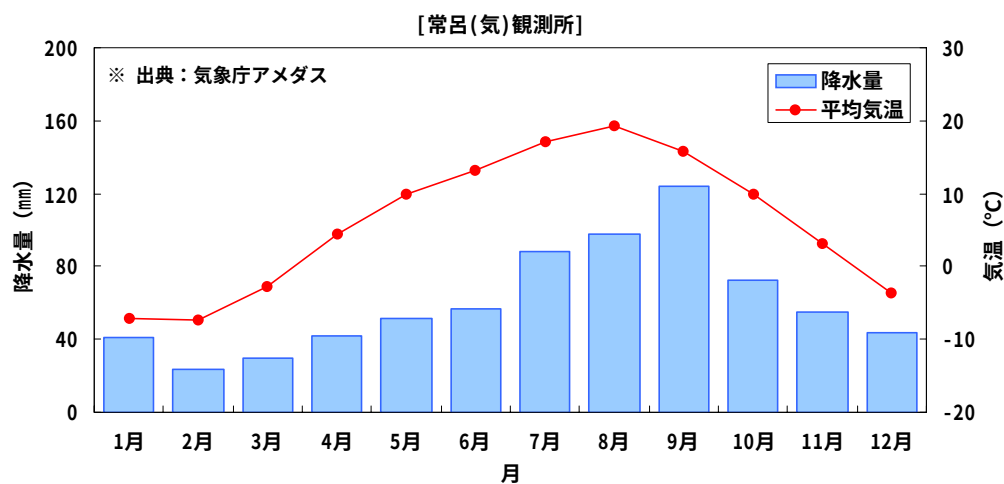


図 1-5 上川沿地点の降水量と平均気温[過去 20 ヶ年(1985～2004)の平均]

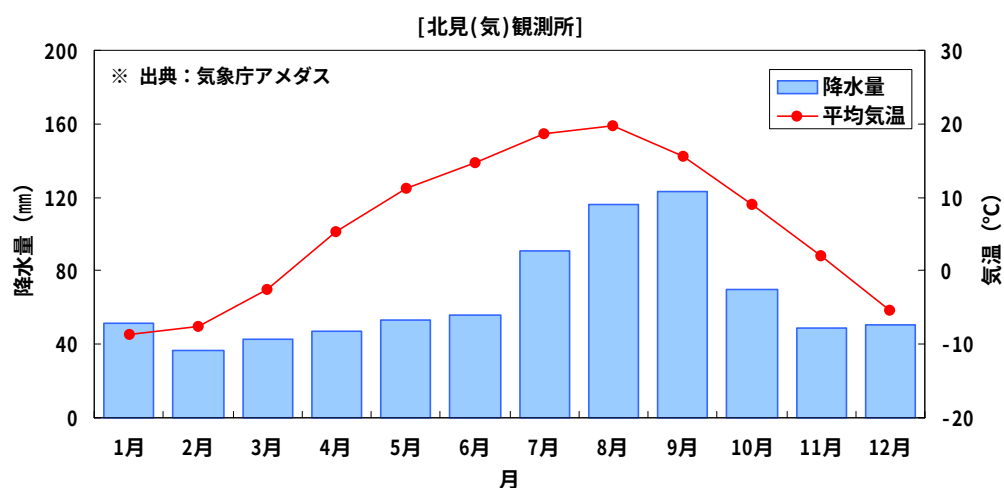


図 1-6 北見地点の降水量と平均気温[過去 20 ヶ年(1985～2004)の平均]

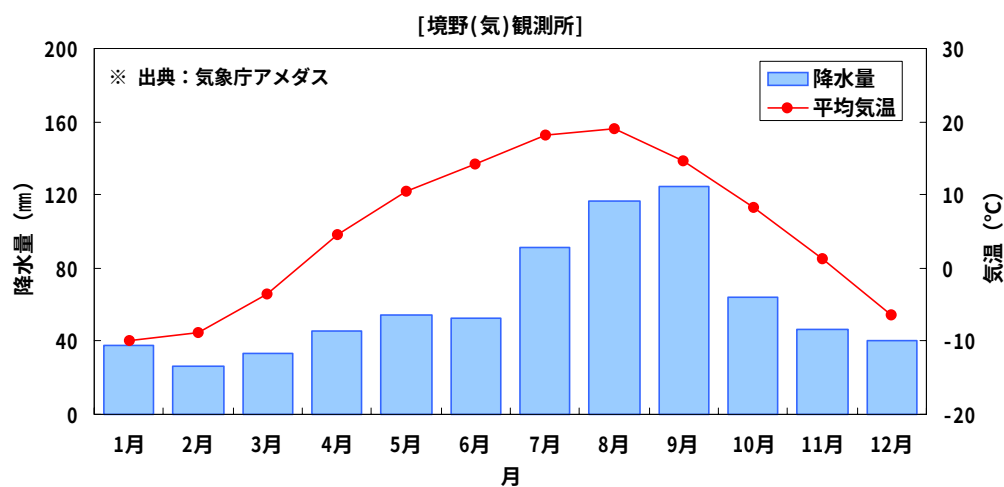


図 1-7 置戸（境野）地点の降水量と平均気温[過去 20 ヶ年(1985～2004)の平均]

1-5 オホーツク海の流氷

オホーツク海は北緯 62 度から 44 度にいたる南北約 2,000km にもおよぶ細長い海である。オホーツク海のほぼ全域は毎冬、厚い流氷に覆われる。オホーツク海で最初に凍結するのは北緯 55 度線上の西端にあたるシヤンタル島周辺及びそこから北東に延びる海岸沿いであり、早い都市では 11 月初旬に凍りはじめる。

シヤンタル島付近で始まった結氷域は東に拡大し、12 月始めには樺太沿岸の北端にまで達する。その後、樺太東岸に沿って南に延び、また東の方にも拡大する。北海道沿岸への襲来はほぼ 1 月中旬である。2 月初めには、流氷範囲は千島列島の南端に達し、その一部は太平洋に流出を始める。

3 月の初旬もしくは中旬に流氷域が最大となり、オホーツク海沿岸は毎年厚い流氷で覆われる。

3 月以降、流氷の拡大経路と丁度逆の経路をたどって流氷が後退する。樺太北部沿岸では 5 月初旬でも流氷がみられ、オホーツク海に流氷が完全になくなるのは 6 月に入ってからである。

流氷の厚さは北海道沿岸で 40cm から 50cm、北部では 1m 強である。しかし、互いに積み重なった氷(これを氷丘という)の高さは、北海道沖でも海面上数メートルに達するのが珍しくない。

2. 流域及び河川の自然環境

2-1 流域の自然環境

2-1-1 植生

常呂川流域の植生は日本の9植物区系のうちで「えぞむつ地域」に入る。植生と関係の深い地形は大まかに言って南北に走る3列の山地と、その内側に同じく南北に走る2列の平地からなっている。広大な地域をもち、高い山脈や東部の台地、中央部には残丘植物があり、常呂川とその支流、さらにはこれに流れ込む小川、溪流を作る流域平地の植物、低平地な湿地などの複雑な地形は、常呂川流域の多彩な植生を形成している。

常呂川流域と石狩川との分水界をなす武華山～三国山～勝北峠に連なる稜線部は、ミヤマハンノキ、タカネナナカマド、ウコンウツギ等の亜高山性低木林、あるいはササ群落等の低い植物群落が分布しており、高山植物は特に風衝条件が厳しいところを中心に局部的に分布している。亜高山性低木林をとりまくようにダケカンバ林が分布しているが、純林状のダケカンバ林は範囲が限られており、下部に続くエゾマツを主体とした針葉樹林内にも混生し、場所によっては針広混交林の林相を示すところもある。

標高700～1,400m前後の区域にはかなりの自然林が残存し、エゾマツ、トドマツが優占する針葉樹純林状の林相を示すところが多い。針葉樹自然林の構成種は、エゾマツ、トドマツの高木層の下にナナカマド、オガラバナ、ヒロハツリバナなどの低灌木が散在する程度である。

中流部から下流部では海拔高度が低くなるにしたがって、ミズナラ、エゾイタヤ、シナノキ、オヒョウ、ハルニレ等の落葉広葉樹が混生する割合が大きくなり、針広混交林の林相を示すようになる。また、海拔高が300～400mとなれば、落葉広葉樹の割合がさらに高くなり、広葉樹自然林の相観を示すところもでてくる。

また、置戸町の常呂川源流域近くに位置する常元針葉樹林および常呂川河口からサロマ湖の砂州にいたる海岸部に位置する佐呂間湖常呂カシワ林は、環境庁の選定した特定植物群に属している。選定基準としては原生林もしくはそれに近い自然林となっている。



写真 2-1 トドマツ



写真 2-2 常呂のカシワ林



图 2-1 常呂川植生図

2-1-2 哺乳類

流域の山間部には、自然林が広く残されている。また、集水域稜線を挟んだ南側には石狩川源流域や大雪山系の山々が連なっており、哺乳類の生息環境としては恵まれた地域である。このような環境には森林性、もしくは深山性のエゾクロテン、エゾモモンガ、さらには大型獣のヒグマ、エゾシカなどを含む多くの種が生息する。また、武華山周辺の高山帯には、ナキウサギの生息も知られている。

中流部では平野部の農耕地が河川周辺に広がり、流路沿いにヤナギなどの河畔林が分布するほか、人工林の多い樹林部が所々に見られる。生息する種はイタチ、シマリスなどの小・中型獣が主体となり、樹林部でエゾユキウサギなどの森林性の種も出現する。

しかし、市街地を通過する部分では極端に生息種が少なくなる。下流部は中流部とほぼ同様の生息環境で、生息する種は中・小型獣が主体となっている。

なお、カラフトアカネズミが希少種(レッドデータブック)に、エゾクロテンが情報不足(レッドデータリスト)、エゾモモンガが主要野生動物(自然環境保全調査)となっている。



写真 2-3 エゾシカ



写真 2-4 ナキウサギ

2-1-3 鳥類

上流部は自然林が広く分布し、大雪山系に連なる地域である。高山帯ではホシガラス、ビンズイ等、森林帯ではハシブトガラ、キビタキ、エゾライチョウ、エナガ、ハギマシコ、コルリ、オオアカゲラ等が生息する。

平野部では農耕地、ヤナギを主とする河畔林、人工林が分布し、比較的開けた環境となっている。生息する種は疎林性種のほかに、河川性の種が生息する。河口部付近の海岸部は、水鳥主体の生息環境となり、オオハクチョウ、カルガモ、オオセグロカモメ等が見られる。

天然記念物であるオジロワシ、オオワシ、クマゲラ、エゾライチョウや環境省レッドデータブック掲載種のおシドリ等が確認されている。



写真 2-5 オジロワシ



写真 2-6 エゾライチョウ



写真 2-7 クマゲラ

2-1-4 両生類・爬虫類

常呂川で確認されている両生類はアマガエル、エゾアカガエル、ニホンアマガエルなどである。代表的な出現種としては、エゾアカガエルが挙げられ、特に湿地性の植物が分布する箇所において多く確認されている。

爬虫類ではシマヘビが多く確認されており、この他にはアオダイショウなどが確認されている。



写真 2-8 エゾアカガエル

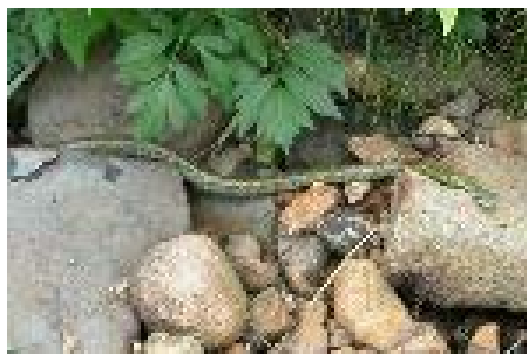


写真 2-9 アオダイショウ

常呂川では、下流域においてワカサギ、エゾウグイ、ウグイ、アシシロハゼ、ヌマガレイ等が確認され、中流域にはフクドジョウ、エゾウグイ、イバラトミヨ等、上流域にはサクラマス（ヤマメ）、シベリアヤツメ、ヤチウグイ、エゾイワナ等が分布している。

Figure 1: Distribution of fish species in the Kurohara River. The top part shows a map of the river with sampling locations marked by vertical bars: 常呂橋 (Tohoro Bridge), 忠志橋 (Chushiji Bridge), 常呂第2頭首工 (Tohoro No. 2 Headworks), 若松大橋 (Wakamatsu Bridge), 金比羅橋 (Kanbira Bridge), 常呂第1頭首工 (Tohoro No. 1 Headworks), 常呂川頭首工 (Tohoro River Headworks), 林友橋 (Hayashi Tomo Bridge), 二階常呂川 (Nishii Tohoro River), 鹿ノ子ダム (Kashiko Dam), and 上ホロカトコ川 (Uehorokato River). The bottom part is a table showing the presence (black dot) or absence (empty circle) of various fish species at these locations. Species are grouped into three categories: 純淡水魚 (Pure Freshwater Fish), 回遊魚 (Migratory Fish), and 汽水・海水魚 (Brackish/Sea Water Fish).

魚種 (Fish Species)	常呂橋	忠志橋	常呂第2頭首工	若松大橋	金比羅橋	常呂第1頭首工	常呂川頭首工	林友橋	二階常呂川	鹿ノ子ダム	上ホロカトコ川
コイ (Common Carp)	●										
ギンブナ (Silver Bream)	●										
キンブナ (Golden Bream)	●		●		●						
キンギョ (Goldfish)	●		●	●	●						
ドジョウ (dojo hio)	●	●	●	●	●						
エソウグイ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●				
フクドジョウ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
ニジマス (Rainbow Trout)	●	●	●	●	●		●		●		
ヤマメ (Japanese Trout)	●	●	●	●	●		●		●		
エゾイワナ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
トミヨ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
イバラトミヨ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
アマゴ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
カワヤツメ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
ウグイ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
ワカサギ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
ニジマス (Rainbow Trout)	●	●	●	●	●		●		●		
サケ (Salmon)	●	●	●	●	●		●		●		
ギンザケ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
カラフトマス (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
シマウキゴリ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
ウキゴリ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
トウヨシノボリ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
ルリヨシノボリ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
ヌマチチブ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
アメマス (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
アシシロハゼ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
ヌマガレイ (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
Lethenteron属の一種 (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
Tribolodon属の一種 (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
Pungitius属の一種 (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		
Carassius属の一種 (Japanese Loach)	●	●	●	●	●		●		●		

図 2-1 常呂川における魚類流程分布図



写真 2-12 ヤマメ

2-1-6 昆虫類

山岳地域、山麓地域の森林では、森林性昆虫が分布している。

また、河道内の状況は、上流域では森林を主体とした生息環境を呈しており、森林性の昆虫類、溪流性のトンボ類が生息している。平野部では農耕地として利用されている地域のほかに、草原、ヤナギ類などの河畔林からなる生息環境を呈しており、草原性の昆虫が分布している。下流域では小規模なヤナギ低木からなる河畔林が主体となっており、草原性の生息環境を呈している。

常呂川流域の昆虫類のうち特に貴重なものは、マンシュウアオモンイトトンボ及び、カラフトヨツスジハナカミキリである。マンシュウアオモンイトトンボは北見付近のほか、紋別付近、網走のリヤウシ湖、利尻島の姫沼の4地点で発見されている珍種であり、これまで採集された個体数も少ない。カラフトヨツスジハナカミキリは、国内では北海道特産種であり、道東地方に何箇所か分布するほかは、大雪山国立公園の層雲峡だけにしか存在が確認されていない。

シベチャケンモンも北海道の特産種で、既産地は道東方面に片寄っている。また、ヒメギフチョウは北見、能取湖畔などに生息するとされているが、いずれも個体数は少ない。

このほかでは、チャマダラセセリ、カラフトタカネキマダラセセリ、ヒメウスバシロチョウ、エゾリンゴシジミ、ジョウザンシジミなどの貴重種が確認されている。

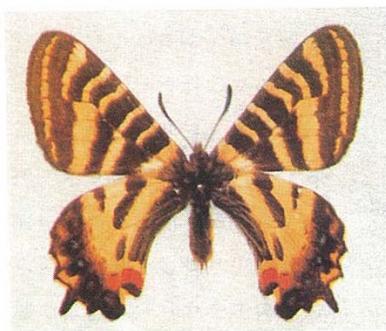


写真 2-13 ヒメギフチョウ



写真 2-14 エゾリンゴシジミ

2-2 河川及びその周辺の自然環境

源流～置戸市街地まで（源流部）

- ・ エゾマツ・トドマツ林等の針葉樹林が広く分布する。
- ・ フクドジョウ、ハナカジカなどの魚類が生息する。

置戸市街地～無加川合流点まで（上流部）

- ・ 河川周辺の山付き林には、ハルニレ、ミズナラが比較的多くみられ、高水敷には、オノエヤナギやエゾノキヌヤナギ等のヤナギ群落や、クサヨシ、ヨシ等の群落が分布している。
- ・ シベリアヤツメ、ヤチウグイ等が生息している。
- ・ 常呂川第一頭首工（63.8Km）までサケが遡上産卵する。サケの産卵床が多く分布する。

（無加川合流点付近）

- ・ 無加川合流点付近の中の島公園には、ハルニレ大径木林が分布し、地域のシンボルになっている。
- ・ 湧水があり、サケの産卵床が多い。

無加川合流点～仁頃川合流点まで（中流部）

- ・ 忠志橋には、イワツバメの集団営巣地がみられる。
- ・ シベリアヤツメ、エゾウグイなどが生息し、サケの産卵床が点在する。
- ・ 高水敷は主に農地や公園、グラウンドとして利用されている。

仁頃川合流点～河口まで（下流部）

- ・ 発達したハルニレ林などが山月区間の所々にみられる。河岸には、オオイタドリ、クサヨシ等の草本や、オノエヤナギ・エゾノキヌヤナギ等の木本が繁茂している。
- ・ 河口左岸の砂丘地には、ハマニンニクが小群落を形成している。
- ・ 河口部は蛇行が多く、人工池、河跡湖等の止水域も多く分布しているため、オジロワシ等の渡り鳥の中継地や、水鳥の集団分布地になっている。
- ・ ワンドや瀬淵等、多様な環境がみられ、魚類等の良好な生息環境になっている。
- ・ 高水敷は主に農地利用されている。

2-3 特徴的な河川景観や文化財等

2-3-1 景観・景勝地

大雪山国立公園の境界部にあたる武華山(1,579m)は流域の最高峰であり、訪れる登山客も多く、高山植物の宝庫でもある。秋には針葉樹とのコントラストをなす紅葉が美しい。

常呂川本川上流には鹿ノ子ダムによってせき止められた人造湖おけと湖があり、変化に富む景観を形成している。鹿の子温泉や温根湯温泉等の自然に包まれた温泉地が点在している。

また、流域内では四季を通じて多彩なイベント等を開催し、住民が一体となって観光を盛り上げている。



鹿ノ子ダム



常呂遺跡



温根湯温泉



埋蔵文化財センター



温根湯のエソムラサキツツジ



信善光寺「屯田兵人形」

表 2-1 主な観光対象

項目	市町村名	名称	内容
自然	北見市	美里洞窟	美里洞窟は石灰岩が雨水の浸食によってできた自然の洞窟で、壁面に鍾乳石が沈着した鍾乳洞遺跡。古代の人が狩猟のために一時的に使っていた住居といわれている。
	北見市	金刀比羅山	常呂市街地の南のある金刀比羅山。植樹された桜の木1,300本とつつじの木500本が植えられおり、例年5月には、満開の桜が咲き、「桜まつり」が開催されるなど、北見近郊の桜の名所として市民に親しまれている。また、金刀比羅山の清流にヘイケホタルが生息しており、例年7月下旬には連日20匹程度のホタルが美しい光を放ち、夏の風物詩となっており、「ホタル鑑賞会」が開催されている。
	北見市 (常呂町)	ところ遺跡の森	常呂川の河口からサロマ湖西岸にかけてのオホーツク海岸沿いの砂丘上に有る遺跡群で昭和49年に国指定の遺跡となり東大が今も調査研究を続けている。
	北見市 (留辺蘂町)	つつじ公園	つつじ山の下に広がる豊かな公園。公園内にはサイクリングロードが整備されていてバードウォッチングや森林浴も楽しめる。芝生広場には3千本もの各種つつじが植樹されている。その他、全天候型のテニスコート、木製遊具などが配置され、キャンプ場もある。
	置戸町	風穴	春日の中山道有林内にあり、市街から約16km、常呂川と仁居常呂川に挟まれた溶岩台地に形成された中山の南斜面に広がる森林にある風穴地。ナキウサギが生息している。森林はトドマツ、アカエゾマツにイタヤカエデなどが混在する針広混交林を主体とし、所々には厚いマット状に発達したコケ類が多い、その上に針葉樹林が成立し林床には亜高山から高山性の植物が生育する風穴植生が見られる。学術的価値があるとして北海道が学術自然保護地区として指定した。
温泉	北見市 (留辺蘂町)	おんねゆ温泉	オホーツク地域で最大規模を誇る温泉。四季を通して約80万人が訪れる天然温泉郷。他にも滝湯温泉、ボン湯温泉とそれぞれの風情と泉質を持った温泉があるため、地域の人達にはもちろん湯治客にも人気のある温泉。
	北見市 (留辺蘂町)	滝の湯温泉	名前の由来、アイヌ語ではシケレベツ地区になりますが、お湯が豊富なことから滝の湯の名がついたといわれている。泉質がとてつづつしていて、皆さんに愛されている温泉。
	北見市 (留辺蘂町)	ボン湯温泉	名前の由来、ボン：オンネが大きいに対して小さいという意味のアイヌ語から名付けられている。火傷など皮膚の治療に効果があるとされ、近郷近在はもとより府県からも湯治客が訪れている。
	北見市 (端野町)	のんたの湯	端野町のふるさと100年を記念して掘られたこの温泉は、疲労回復にとっても効果のある温泉。
	置戸町	勝山温泉ゆうゆ	緑豊かな森と、常呂川の清流のすぐそばにある温泉。近くにはパークゴルフ場もあり家族連れでゆったりと過ごすことができる。
	訓子府町	温泉保養センター	純度100%の天然温泉。入浴後は、休憩室でのんびりくつろぐことができる。
湖	北見市	富里湖	仁頃山(標高829m)の麓に広がる農業用ダム。富里湖森林公園とキャンプ場があり、市民憩いの場。
	置戸町	鹿ノ子ダムおけと湖	原生林の中に生まれたおけと湖。鹿ノ子ダムの建設でできた湖を中心にして新しい観光開発が進められている。宿泊施設もある。
資料館	北見市	町立山の水族館・郷土館	北海道内に生息する約50種類の淡水魚を集めた全国でも珍しい水族館。巨大なイトウが50匹近い群れをなし悠然と泳ぐ。併設する温泉水族館では世界の珍しい熱帯魚もみることができる。また、郷土館では、開拓時代をしのばせる森林鉄道、村落などを再現したジオラマが見もの。
	北見市 (留辺蘂町)	樹北きつね牧場	日本で唯一北きつねの放し飼いの牧場です。自然の林野をそのままに活かした遊歩道からは約100匹もの北きつねが元気に遊ぶ姿やエサをねだる姿など、かわいらしい光景が見られます。
	北見市 (留辺蘂町)	北海道きつね村	世界のきつねにあえる：きつね村、北きつね、青きつね、赤きつね、銀きつね、白きつね十字きつねブラチナきつね、プチきつね、などのかわいいしぐさが見られます。
競馬	北見市	ばんえい競馬(北見競馬場)	最高1トンもの鉄そりを馬にひかせ、全長200m、途中に2ヶ所の障害があるコースを競うばんえい競馬。開拓に活躍した農耕馬で農民たちが楽しんでたお祭り競馬が発展したもので、40年以上の歴史を持つ。迫力あるレースを堪能できる。
道の駅	北見市	道の駅・おんねゆ温泉	平成7年8月3日に指定登録を受け、大型駐車場と快適なトイレを完備した北海道24番目の道の駅。そのほか、からくり王国の売店、リラックスガーデン、花菖蒲園があり、からくりハート時計塔「果夢林」と町立山の水族館・郷土館に隣接している。
体験学習	置戸町	森林体験交流センター(置戸町)	おけと湖周辺の自然とのふれあいをサポートしてくれる専属のインストラクターがバードウォッチング、森林観察、山菜・キノコ狩りなどの指導をしてくれる。森や樹木の関りをテーマに各種行事も行っている。木の玩具を通じた木の学習体験や、木に関するQ&A情報セッションもある。 主な行事 5月：山菜教室、バードウォッチング。6月：野の花観察会。9月：きのこ教室

表 2-2 主な観光対象

項目	市町村名	開催月	名称	内容
イベント	北見市	5月	オホーツク木のフェスティバル	毎年初夏に行われるのが、オホーツク「木」のフェスティバル。オホーツク圏の根幹産業である林業の振興を目指し、「木」の素材が持つ温もり、優しさを生活に積極的に取り入れてもらうための木製品が多数出品される。
	北見市	6月	でっかいどうオホーツクマーチ	「でっかい自然・ふれあいウォーク」をテーマにオホーツクの自然と味覚にふれあい、友情の輪を広げる事を目的とした歩く大会です。2つの大会からなり全体で4日間の日程で行います。そのうち2日間は「ハッカの大地北見ツーデーマーチ」という北見～端野町を歩く6コースが用意されています。日本マーチングリーグ認定大会となっています。
	北見市	7月	北見ぼんちまつり	7月中旬、短い夏を惜しむかのような熱気あふれるのが「北見ぼんちまつり」。市民がゆかた姿で中心街を練り歩く「舞踊パレード」を皮切りに「花火大会」、そして200mの綱をフンドシ姿の若者が引き合う「屯田大綱引き」と北の夏はおおに盛り上がりします。
	北見市	7月	香りやんせフェスティバル	7月には色とりどりの花が咲き誇る「香りやんせフェスティバル」が開催されます。香り体験コーナー、ハーブお楽しみコーナー等各種イベントが盛りだくさん。ハーブウェディングでは幸せが会場一杯に広がる。
	北見市	8月	北見市ラグビーフェスティバル	モイワスポーツワールドをはじめ、東陵運動公園、河川敷グラウンドと、オール芝の恵まれたスポーツ施設を背景に、毎年夏になると全国からスポーツマン達が強化合宿のために来北します。明治大学をはじめとした関東の大学や実業団など、日本を代表するラグビーチームが爽やかな青空のもとで練習に汗を流します。そして8月に、各チームが東陵運動公園ラグビー場に集まり、北見ラグビーフェスティバルが開催されます。
	北見市	10月	北見菊まつり	毎年、10月中旬から11月上旬まで開催されるのが全道一の歴史と規模を誇る「北見菊まつり」。丹精こめた菊の美しさが訪れる人々の目を奪い、NHKの大河ドラマを題材とした菊人形の絵巻に酔いしれる。秋の陽差しに美しく1万鉢を越える花に道内各地から大勢の人が訪れる。
	北見市	10月	オクトーバーフェスティバル	国内地ビールの発祥地北見で、道内や海外のビールメーカーが自慢のビールを出品する。毎年4日～1週間程の日程で連日ビール好きで賑わっており、中には毎日のように参加している方も。全銘柄を飲み比べてみたくなる癖になるイベント。
	北見市	2月	北見冬まつり	「冬は友だち」をテーマに市民参加の「北見冬まつり」が毎年2月上旬に開催。大小様々な氷雪像がプリズム光に浮かび上がる夜の会場はファンタジックなムードに包まれる。また、ギネスブックに挑戦する3万個のアイスクャンدلも素晴らしい。北見冬まつりは冬の季節に美しいアクセントを添えてくれる。
	北見市	2月	北見厳寒の焼き肉まつり	2月には「厳寒の焼き肉まつり」が北見芸術文化ホール駐車場を会場に開催されます。これは「北見の焼肉文化をPRしよう」と転勤族の皆さんの発案から始まったもの。-10度前後の夜寒の下、箸の手を休めることなく、肉を味わう市民で盛り上がりします。※「北見厳寒の焼き肉まつり」は「北見冬まつり」の前日に行われます。
	北見市(常呂町)	8月	ところふるさとまつり	2日間行われる盆踊りと2日目に行われる「仮装盆踊り」。常呂川の川辺で打ち上げられる花火大会も。
イベント	北見市(常呂町)	2月上旬	ところ雪んこまつり	魚の輪投げ、じゃんけん大会などのイベントや、出店、建物内では「ミニ科学の祭典」などの体験学習も
	北見市(常呂町)	6月	サロマ湖100キロウルトラマラソン	湧別町からサロマ湖を一周して常呂町にゴールする鉄人レース、日本陸上競技連盟の公認コースでもあり、国内ウルトラマラソンの中でも最大級の大会。100キロレースのほか、佐呂間町を発する50キロのレースも同時に行なわれている。
	北見市(常呂町)	7月	オホーツクインターナショナルサイクリング	雄武町から斜里町までのオホーツク海沿岸212キロを2日間かけて走るサイクリング大会。順位を争うものではなく、風景や参加者の交流などを楽しみながら完走するのが目的。毎回、子どもからお年寄りまで幅広い年代から約1500人の参加があります。
	北見市(留辺瀨町)	5月上旬	おんね湯温泉つつじ祭り	28万本のつつじの咲く「つつじ山」を舞台に5月上旬に開催されるおんね湯温泉の春祭り。
	北見市(留辺瀨町)	8月	おんね湯温泉祭り	神輿を担いで男女が練り歩く「みこし川渡御」がメインイベントになっているおんね湯温泉の夏祭り(8月第1土・日)。あわせて花火大会が開かれ、川面に浮かび上がる花火は風情たっぷりです。
	北見市(留辺瀨町)	8月	るべしべ夏祭り	毎年8月中旬に、仲町中央公園などで開催されます。
	北見市(端野町)	8月	太陽まつり	メビウススキー場を会場として毎年8月に行われている。メインイベントは『ウォーターロデオでのんたの湯』です。他にも端野豊稔太鼓、キャラクターショー、端野小・中学校による吹奏楽演奏、お楽しみ大抽選会が行われている。
	北見市(端野町)	9月	たんのカレーライスマラソン	1チームは4名で、4名それぞれが距離の異なるカレールーコース(5km)、肉コース(4km)、玉ねぎ・にんじんコース(3km)、いもコース(歩くコース2km)に分かれて、地元産の食材を取りに走ります。ゴールした後は、メンバーが受け取ってきた食材を使い、みんなでカレーをつくり、おいしく・楽しく食べるというもので、決してタイムや順位を競うレースではありません。
	訓子府町	5月下旬	芝ざくらまつり	町内の観光スポットでもあるレクリエーション公園で、66万株の芝ざくらをみながら、春の心地よい風の中、緑の芝生でジンギスカンを食べ、ビールを飲んでみませんか。
	訓子府町	7月	ふるさとまつり	町内の青年4団体が中心となりさまざまなイベントが繰り広げられ、町内外から集まった多くの人が祭りを満喫します。迫力ある踊りで観客を沸かせる「よさこい・くんねっぐ」、「行灯パレード」、「花火大会」や、「歌謡ステージ」(STVラジオ公開録音、2名の方がゲスト出演)、青年4団体によるイベント、JAアトラクション(焼肉コーナー、野菜やメロン等を販売)のほか、町内の婦人団体や商工会会員の売店コーナーがある。
イベント	訓子府町	2月	さむさむまつり	町内の青年4団体が造った雪像を中心に、さまざまなイベントが行われる。アトラクションや、甘酒の無料提供、雪球のかわりにゴムボールを使用した「雪合戦」、キャラクターショーなどがある。
	置戸町	7月	人間ばん馬	その昔、冬山道材で丸太を満載したバチゾリを引く馬の列が何キロメートルも連なった町の歴史を祭りに取り入れた「人間ばん馬」。500kgの丸太が積まれた鉄のソリを、5人または7人で障害2か所を含む80mの距離を引っ張り競い合う全国で唯一の大会です。
	置戸町	9月	もつと馬力だずべえ祭	食べることと遊ぶことが、馬力だずべえ祭のモットーです。各種イベントや出店屋台がある。
	置戸町	1月	おけと湖水釣り大会	鹿ノ子ダム湖でのワカサギ釣り、水中イkeysでのニギマス釣り大会。
	置戸町	7月	おけと湖水まつり	鹿ノ子ダム見学会、釣り大会、カヌー体験教室、ゲームコーナー
	置戸町	7月	おけと夏まつり	前夜祭と本祭があり、前夜祭ではよさこいや焼肉屋台、本祭では「おけと人間ばん馬大会」やモデルを囲んでの「フォトコンテスト」アムレスリング大会などもある。
	置戸町	9月	びーひやら祭り	置戸町大通り商店街が企画している、秋祭り。夏もすでに終り、紅葉も色づきはじめる頃、獅子舞の笛が鳴り響くなか行われている楽しいお祭りです。以前は前夜祭(よみや)もやっていましたが、今では1日にイベントを集約して、楽しい企画で地元の子供達の喜ぶイベントとなっている。
	置戸町	2月	おけと子ども冬まつり	多数のイベントやアトラクションがある子供が主役のまつり。雪合戦や宝探しなど

2-3-2 文化財

常呂川流域には歴史的に重要な文化財、史跡は表 2-3に示すとおり国指定で 2 件、道指定が 2 件(内 1 件は北海道遺産)、市指定が 11 件(内 1 件は北海道遺産)である。

表 2-3 指定文化財

指定の種類	名称	所在地 指定年月日	概要
国	常呂遺跡	北見市 (常呂町) S49. 3.12	我が国では他に例をみない竪穴群であり、縄文文化晩期、続縄文文化期、擦文文化期及び擦文文化後期の墓坑の可能性が強く日本の先史文化を解明する貴重なものである。
	浜松千鳥図鐔銘安親	北見市 S30. 2. 2	江戸時代の名工・土屋安親の作で、形状は丸型、地は素銅石目地で表面に松樹の色絵と金摺付象嵌を施した十七羽の千鳥を配した図柄の鐔(つば)です。表の茎孔に「安親」の銘が刻まれ、彼の作例中でもその技量を最高に示す銘鐔です。
道	温根湯エゾムラサキツツジ群落	北見市 (留辺蘂町) S32. 1.29	温泉街の裏山にあたる「つつじ山」は全国随一のスケールを誇り、北海道の天然記念物にも指定されてる。5月上旬から中旬には、7万株、28万本ものツツジが満開となり、毎年温根湯つつじまつりも行われる。
市 北海道遺産	ピアソン記念館(大正3年建築)	北見市 H8.7.8	洋風建築として貴重な歴史的建造物。ピアソン牧師夫妻遺品等の展示施設として活用。
市	屯田兵屋	北見市 S44.11.3	明治30年、31年。入植した各戸主に与えられた原型の屯田兵屋。内部に遺品、供与品なども展示。
	屯田兵人形	北見市 S44.11.3	屯田兵の偉業をたたえるために制作された75体の人形。屯田兵の風俗を知る貴重な資料である。(昭和7年～10年制作)
	ビーボディ・マルチニー銃	北見市 S45.6.6	1867年～1871年にかけてアメリカのプロビデンス兵器会社で製造され、屯田兵が使用していた。
	広郷遺跡の出土品	北見市 S62.4.15	先土器時代終末期に編年された遺跡で、広郷型細先刃石核を中心とした、石刃等の石器群。(約1万年前)
	中ノ島遺跡の出土遺物	北見市 S62.4.15	文中期からアイヌ期にかけての複合遺跡。特に縄文晩期末の土器群は貴重な資料である。(約2200年前)
	北進遺跡の出土遺物	北見市 S62.4.15	先土器時代終末期に編年された遺跡で、峠下型細石刃石核、彫器等で編成される石器群は重要。(約1万3千年前)
	ハッカ記念館	北見市 H8.7.8	昭和9年に北見薄荷工場事務所として建造される。昭和初期に世界一のハッカ生産地を誇った歴史を伝える関係資料展示施設として活用。
	鎖塚の区域	北見市 (端野町) H4.2.27	明治24年網走～旭川間の国道建設の際死亡し、路傍に埋められた300余りの囚人を弔うためにできた供養碑。
	旧野付牛屯田第四大隊第一中隊本部被服糧秣庫	北見市 (端野町) H4.2.27	明治29年に建設され、第一中隊の被服糧秣庫として使用されたもの。明治37年に一区が払い下げを受け現在地に移転し一部を回収し神社拝殿として使用。
北海道遺産	緋牛内の大カシワ	北見市 (端野町) H8.4.26	樹齢300年以上もしくは350年以上の大カシワ。幹周は全国的にも有数であり、株立ちが一本のものでは全国一。町内では最大最古の樹木である。
	ワッカ／小清水原生花園	北見市 (常呂町)・小清水町	ワッカ原生花園は「龍宮街道」と呼ばれる日本最大の海岸草原。オホーツク海とサロマ湖に面し、春から秋には300種以上の草花が咲き誇る。車の乗り入れ規制や地元漁協による植林など先駆的な試みを展開する。小清水原生花園は一時、花が衰退したが、平成5年より野焼きや球根の植栽、帰化植物の除去を行い、花のあふれる公園によりみがえった後背部の瀧沸湖沿いにあるヒオウギアヤメ群落とそこに放牧される馬の群れは特有の景観。

2-4 河川環境をとりまく背景

常呂川では、川の親しみを広げる催し、イベント等による利用等様々な活動が行われている。

常呂川の年間利用者数は約 49.0 万人(平成 12 年度河川水辺の国勢調査)であり、スポーツ(47%)と散策等(46%)でほとんどを占めている。

河川空間利用に関しては、公園やスポーツ施設等の住民が川とふれあえる空間や、川による地域間交流ができる場が整備される等により親水性の高い河川として使用されている。



香りゃんせ公園



ふるさと祭り(常呂川いかだ下り)



ラグビー場



パークゴルフ場



ソーラーカーレース



北見ぼんち祭り 花火大会(河川敷)

2-5 市民活動

常呂川流域では、流域内市町村で構成される常呂川治水促進期成会等が組織され、常呂川の治水効果の早期向上や河川整備について市民一体となって取り組んでいる。

流域の水防団は災害発生時には河川管理者と連携を図り、被害軽減に努めている。また、常呂川の環境を守るため、河川管理者と一緒に地域住民の方々のボランティアによる清掃活動を実施している。



おけと湖湖水まつり



常盤橋上流での調査風景(無加川)

2-6 自然公園等の指定状況

常呂川流域は自然環境に恵まれた地域が数多く存在しており、これらの保護、保全管理が図られている。常呂川水系における法令指定状況は以下の通りである。

2-6-1 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律(平成14年度法律第88号)に基づく鳥獣保護区

9ヶ所で鳥獣保護区が設定されている。また、銃猟禁止区域は1ヶ所設定されている。

表 2-4 各種保護地域指定一覧

鳥獣保護区等区域						
保護区分	整理番号	市町村	鳥獣保護区名	区域	存続期間	備考
道	183	北見市留辺蘂町	滝の湯	常呂郡留辺蘂町に所在する国有林網走中部森林管理署1028林班のうちイからは、イ及びロの各小班の区域 [特保] 常呂郡留辺蘂町に所在する国有林網走中部森林管理署1028林班ろ小班の区域	平成15年3月31日 ～平成24年9月30日	森林鳥獣生息地 130ha [特保28ha]
	184	北見市留辺蘂町	紅葉山	常呂郡留辺蘂町に所在する網走森林計画区31林班から40林班まで、41林班1から6まで及び30から35までの各小班、42林班及び43林班の区域一円	昭和61年10月1日 ～平成18年9月30日	森林鳥獣生息地 1,157ha
	190	北見市常呂町	福山	常呂郡常呂町に所在する常呂町有林6林班1から8まで、10、13、16及び19から21までの各小班、7林班10、12から21まで、29及び30の各小班並びに8林班5及び59の各小班の区域一円	昭和61年10月1日 ～平成18年9月30日	森林鳥獣生息地 186ha
	192	北見市	若松	北見市若松に所在する道有林北見経営区74林班及び75林班の区域	平成4年10月16日 ～平成24年10月15日	森林鳥獣生息地 340ha
	193	訓子府町	協成	常呂郡訓子府町字開盛123番地の2、123番地の4、125番地の1から125番地の2まで、126番地の1の区域一円	昭和63年10月1日 ～平成20年9月30日	身近な鳥獣生息地 16ha
	194	置戸町	鹿の子沢	常呂郡置戸町に所在する国有林網走中部森林管理署23林班のうちイ小班を除く区域及び24林班の区域 [特保] 常呂郡置戸町に所在する国有林網走中部森林管理署23林班のうちに、ぬ、る、れ、ハ、ニ、ヘ及びチの各小班の区域	平成15年3月31日 ～平成24年9月30日	森林鳥獣生息地 460ha [特保54ha]
	196	網走市	オホーツクの森	網走市に所在する国有林網走事業区117林班、120林班及び121林班並びに常呂郡端野町に所在する国有林北見事業区88林班(ロ小班を除く)の区域一円	昭和61年10月1日 ～平成18年9月30日	森林鳥獣生息地 1,055ha
	210	北見市	本沢	北見市字本沢705番の1に所在する北見市有林54林班1小班から6小班までの区域	平成9年10月1日 ～平成19年9月30日	身近な鳥獣生息地 88ha
	212	北見市	北見美園	北見市東相内に所在する無加川左岸(河川敷を含む。)と西十五号を起点とし、この点から西十五号を南に進み南二線との交点に至り、この点から南二線を西に進み西十九号との交点に至り、この点から西十九号を北に進み無加川右岸(河川敷を含む。)との交点に至り、この点から無加川右岸(河川敷を含む。)を西に進み西二十号との交点に至り、この点から西二十号を北に進み無加川左岸(河川敷を含む。)に至り、この点から無加川左岸(河川敷を含む。)を東に進み起点に至る区域。	平成11年10月1日 ～平成31年9月30日	身近な鳥獣生息地 293ha

銃猟禁止区域					
整理番号	市町村	銃猟禁止区域	区域	存続期間	備考
48	置戸町	おけと湖	置戸町字常元に所在するおけと湖の水面も及びその河川敷地の区域及び置戸町字常元に所在する常呂川本流林道と道道常元中里線との交点を起点とし、この点から道道常元中里線を東に進み鹿の子林道との交点に至り、この点から鹿の子林道を西に進み平の沢林道との交点に至り、この点から平の沢林道を西に進み起点に至る区域及び置戸町字常元483-4、525-2の区域及び国有林34林班ぬ小班・ホ小班、35林班い小班の一部・ハ小班・ニ小班の一部・ホ小班、36林班か小班、37林班と小班・イ小班の区域	平成11年10月1日 ～平成21年9月30日	327ha

※ 平成17年度鳥獣保護区等位置図(別冊編)より

2-6-2 道指定天然記念物

温根湯エゾムラサキツツジ群落(2.5ha)が昭和32年1月29日指定されている。

昭和31年北海道大学館脇操教授の指導の基に同大学農学部植物学教室の梅沢彰氏を中心として調査が行われ、その規模は、我が国としては珍しいほどの広い面積を占めるエゾムラサキツツジの純群落であることがわかり、昭和32年北海道天然記念物に指定された。

このツツジ群落は無加川沿いの丘陵岩礫地に幅60m、延長400mの間に面積2.52haに渡って群生している。

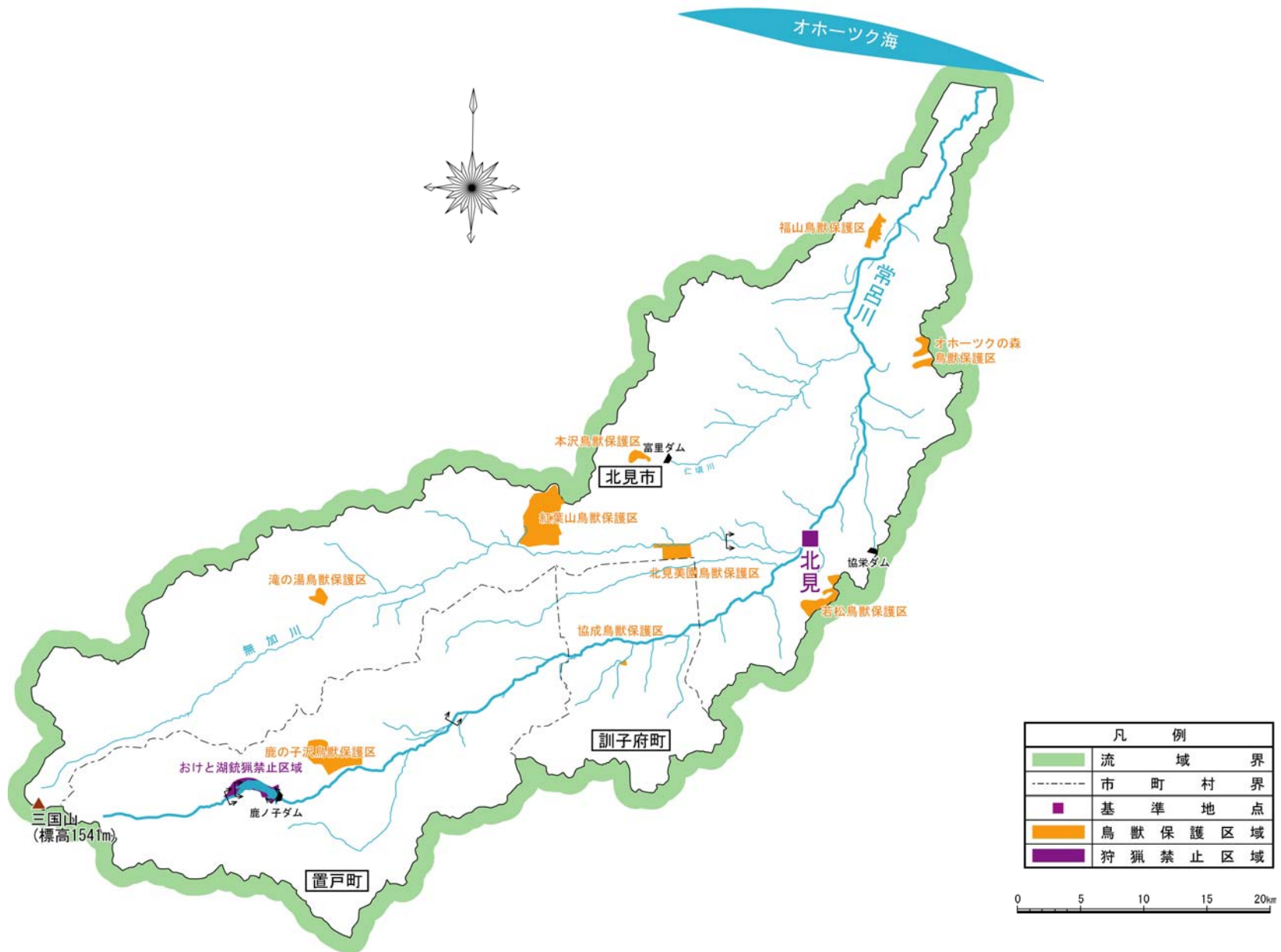


図 2-2 鳥獣保護区・狩猟禁止区域

3. 流域の社会条件

3-1 人口

常呂川流域は、オホーツク地方最大の中核都市である北見市を擁し、置戸町、訓子府町からなる。流域関係市町の総人口は平成 17 年で 138,926 人で昭和 28 年からの推移は表 3-1のとおりであり、約 19%の増加となっている。しかし、市町村別の推移では中心である北見市の人口は昭和 28 年に対し平成 17 年は約 1.4 倍となっており、中核都市としての性格をもっている一方、置戸町・訓子府町の人口の流出は大きく、昭和 28 年に対し平成 17 年は置戸町で約 30%、訓子府町で約 53%となっている。

※北見市は平成 18 年 3 月に北見市、留辺蘂町、端野町、常呂町が合併したため合計値とした。

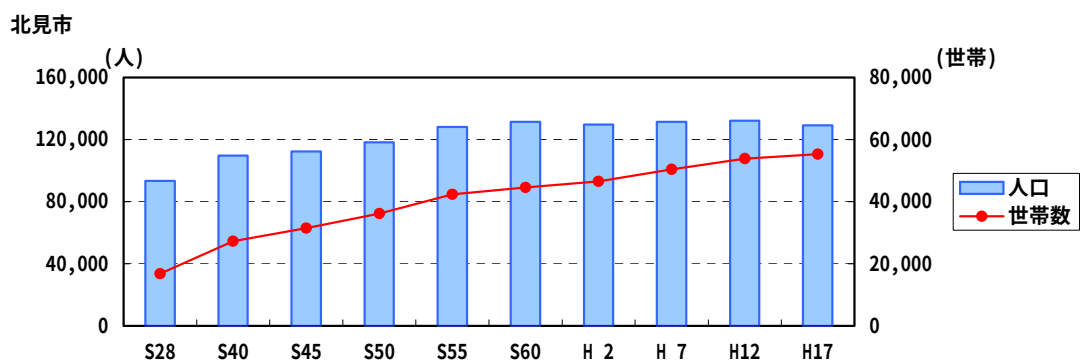
表 3-1 流域内人口

区分	北見市	訓子府町	置戸町	1市2町合計
面積 (km ²)	1,427.56	190.89	527.54	2,145.99
総人口 (人)	129,246	5,981	3,699	138,926.00
世帯数 (世帯)	55,293	2,040	1,455	58,788.00
人口密度 (人/km ²)	90.5	31.3	7.0	64.7

※1 面積の出典：平成17年北海道市町村勢要覧（平成15年10月1日）

※2 総人口、世帯数の出典：平成17年国勢調査（平成17年10月1日）

※3 北見市・留辺蘂町・端野町・常呂町は平成18年3月5日に北見市として市町合併



※1 昭和31年に相内村が北見市に編入されているため昭和28年は相内村を含むデータとした
 ※2 平成18年3月に北見市、常呂町、端野町、留辺蘂町が合併。
 データは1市3町の合計で作成した。

(出典：国勢調査)

図 3-1 北見市の人口・世帯数の推移

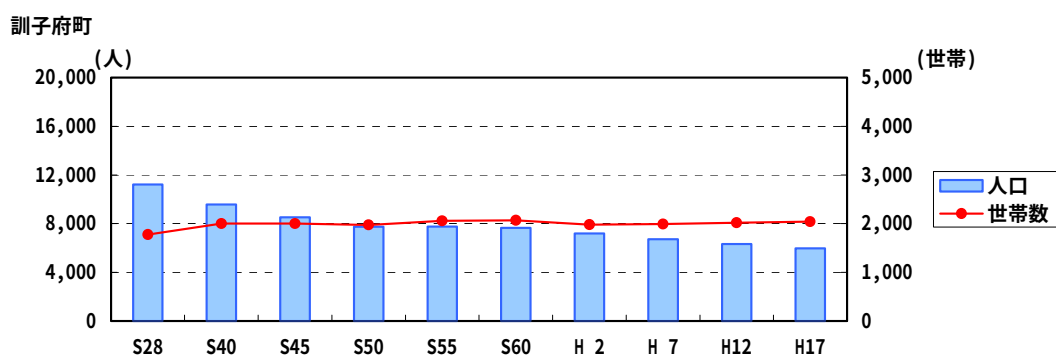


図 3-2 訓子府町の人口・世帯数の推移

(出典：国勢調査)

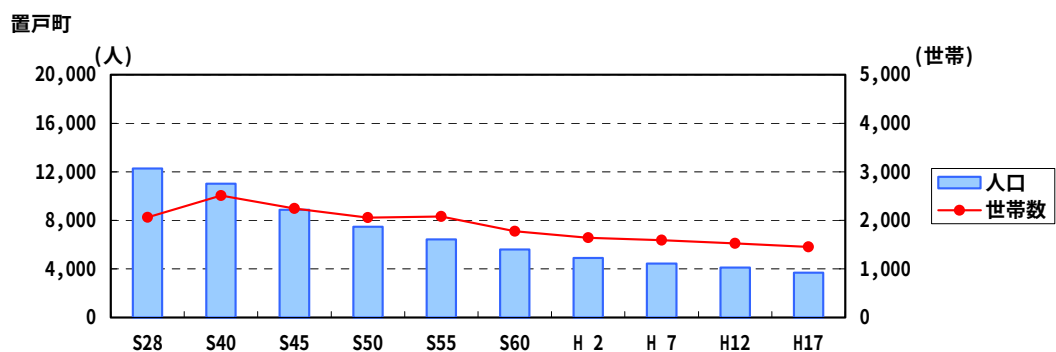


図 3-3 置戸町の人口・世帯数の推移

(出典：国勢調査)

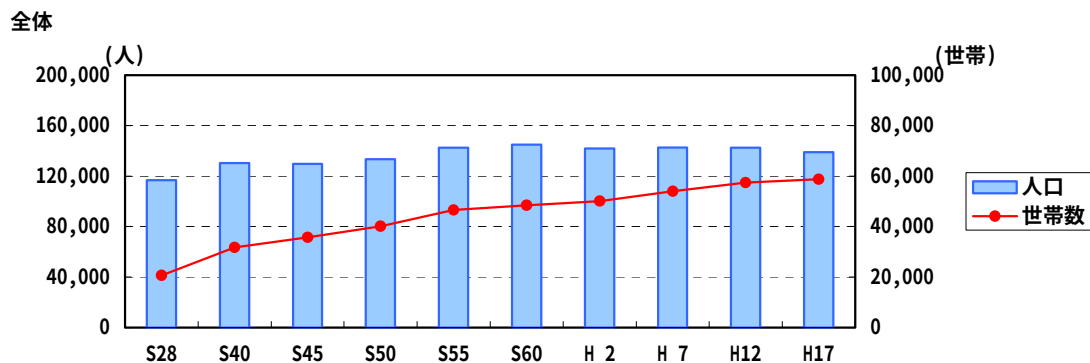


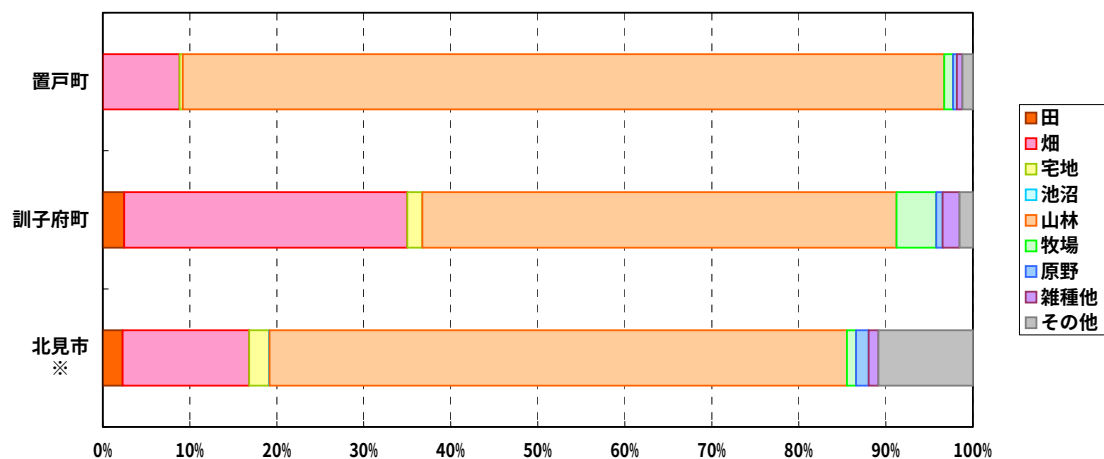
図 3-4 流域関係市町村の人口・世帯数の推移

3-2 土地利用

流域関係自治体の土地利用の状況は、以下のとおりであり、総面積 2145.97km² のうち山林の占める割合が約 71%で最も多く、続いて農用地の約 17%となっている。

山林は上流の置戸町で総面積の 90%弱に対し、中流域の訓子府町は約 54%、北見市では約 66%となっている。

農用地のうち、水田は各市町村ともに保有しているが、その比率は小さく大半が畑作地、草地である。また、北見市は人口が集中しており、宅地の比率も高くなっている。



※ 平成18年3月に北見市、常呂町、端野町、留辺蘂町が合併。データは1市3町の合計で作成した。

出典：平成17年北海道市町村勢要覧（平成15年1月1日）

図 3-5 流域自治体の土地利用状況(H15 年時点)

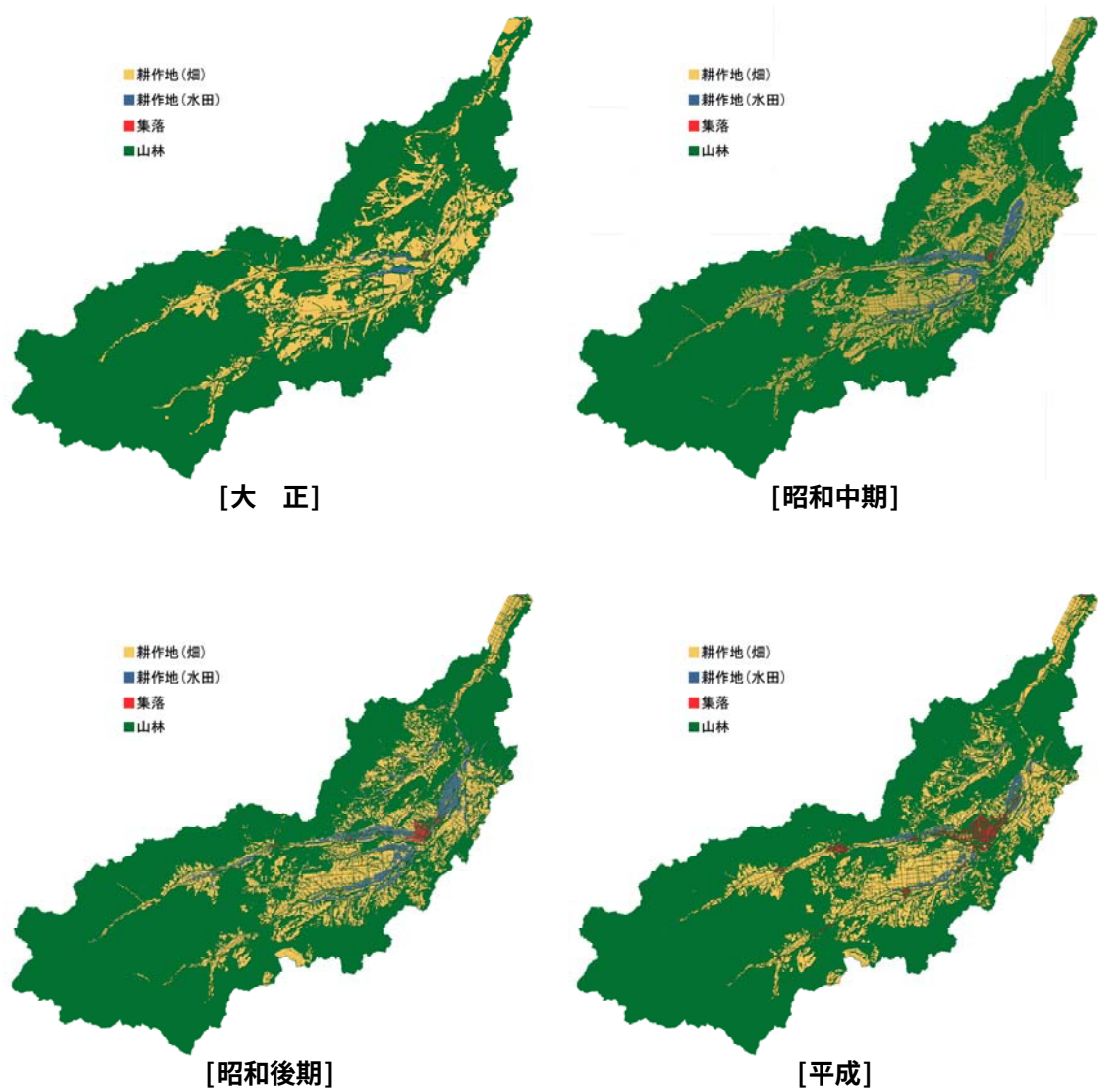
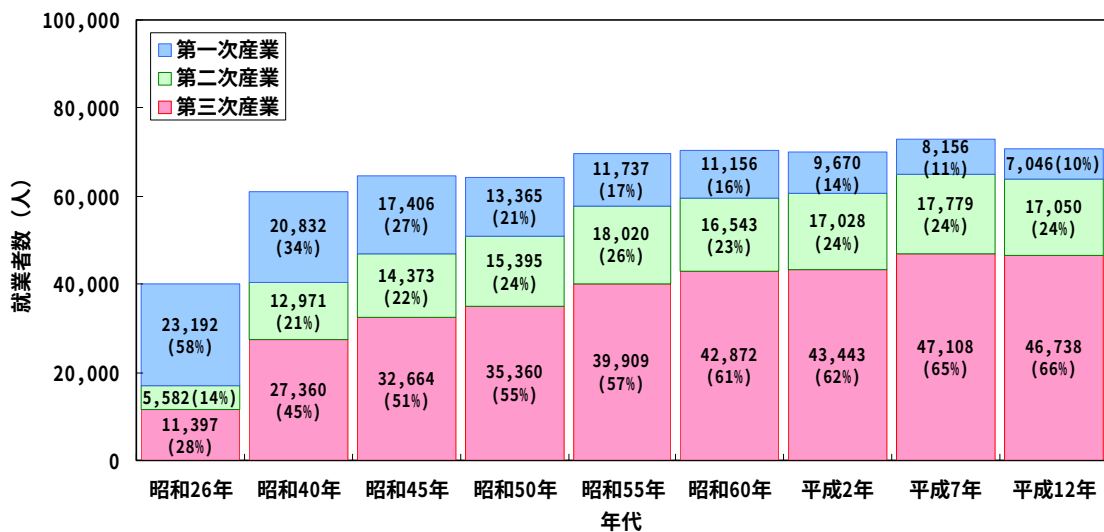


図 3-6 土地利用の経年変化

3-3 産業・経済

流域関係自治体の産業別就業人口の推移を見ると、産業は農林業を主体とし、河口では漁業も盛んであったが、近年の第一次産業の衰退により、第一次産業人口が昭和26年に比べ平成17年では23,192人から7,046と約30%減少しているが、第二次産業が約3.1倍、第三次産業が約4.1倍と高い伸びを示している。

現在、第一次産業就業人口を市町村別で見ると、置戸町、訓子府町で比較的高く28%と39%となっているが、流域関係市町村における3市合計の第一次産業就業人口の比は8%程度である。第二次産業就業人口は各市町村とも19%から25%程度となっており、第三次産業就業人口は北見市で比較的高く、68%程度となっている。その他の町でも42%から53%程度と高い比率を占めている。



※ 昭和31年に相内村が北見市に編入されているため昭和26年は相内村を含むデータとした

(出典：北海道市町村勢要覧)

図 3-7 産業3部門別就業者数の推移

表 3-2 産業別就業人口と構成比

(単位:人)				
市町	第一次産業人口	第二次産業人口	第三次産業人口	総数
置戸町	573	407	1,085	2,065
	27.8%	19.7%	52.5%	100.0%
訓子府町	1,374	658	1,478	3,510
	39.1%	18.8%	42.1%	100.0%
北見市 ※2	5,099	15,985	44,175	65,259
	7.8%	24.5%	67.7%	100.0%
全道	217,908	602,859	1,881,089	2,701,856
	8.1%	22.3%	69.6%	100.0%

※1 出典：平成17年北海道市町村勢要覧 (平成15年10月1日)

※2 平成18年3月5日に北見市、常呂町、端野町、留辺蘂町が合併

※3 下段は構成比率(%)

3-4 交通

産業への基盤となる幹線交通系統のうち道路網は、旭川市から北見市の無加川沿いを経て網走方面に通じる国道 39 号、網走市から稚内市に至るオホーツク海沿いを結ぶ国道 238 号、北見市から佐呂間町、旭川方面に通じる国道 333 号、生田原方面から北見市、置戸町を通り、帯広方向に通じる国道 242 号があり、オホーツク海沿岸の各都市間と道内各地を結ぶ交通体系に貢献している。

公共交通網の内鉄道網は、昭和 62 年 3 月に湧網線(網走～中湧別)、平成 18 年 4 月に第 3 セクター鉄道ふるさと銀河線(北見～池田)が廃止されたため、現在は道央圏とオホーツク沿岸を結ぶ JR 石北本線(新旭川～網走)の 1 路線があり、オホーツク地方の物資輸送や観光旅客輸送に大きな役割を果たしている。

現在、遠軽と北見および陸別町を結ぶ地域高規格道路整備の計画が進められており、流域のさらなる発展が期待されている。

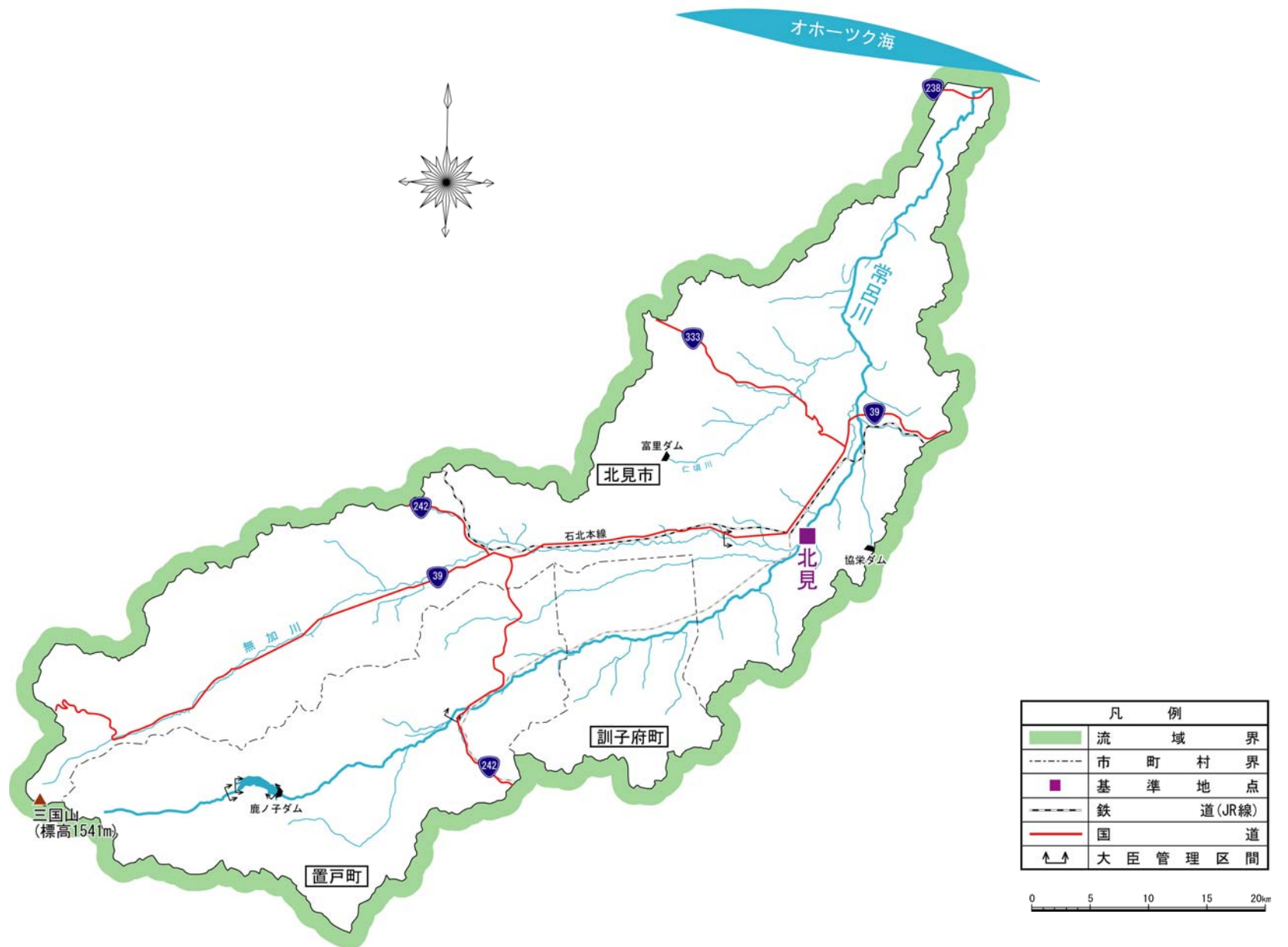


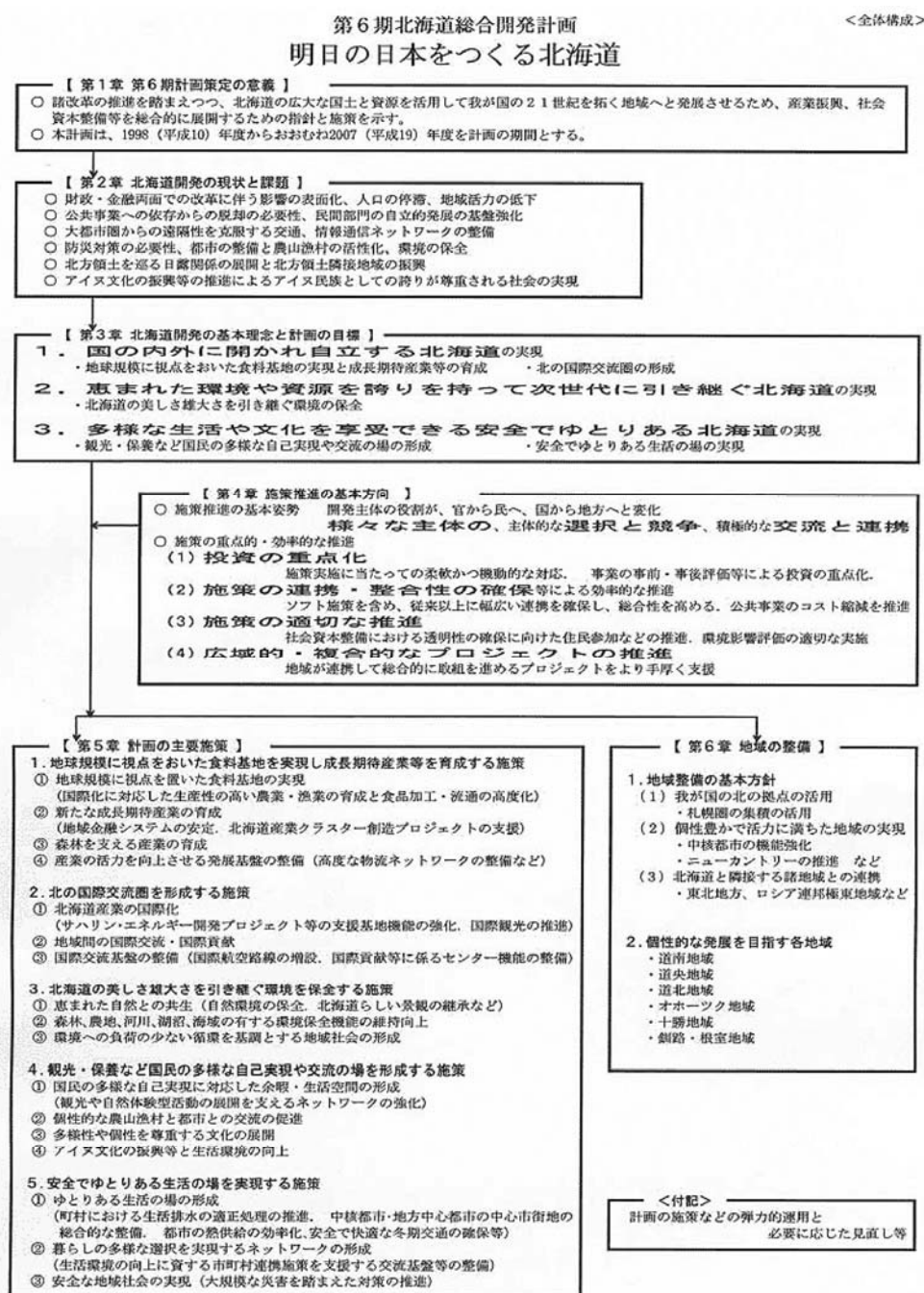
図 3-8 常呂川流域における道路・鉄道網位置図

3-5 関係ある法令の指定状況

3-5-1 第6期北海道総合開発計画

北海道総合開発計画は、行政改革や国際化、地球環境問題への知見の集積等の大きな情勢の変化を受け、地球規模に視点を置いた食料基地、北の国際交流圏の形成、観光・保養基地の形成や北海道が有する美しく雄大な自然環境の保全、安全でゆとりのある生活環境の創造を目的としている。

これらの目的を重点的・効率的に推進してゆくための一方針として広域的・複合的な地域プロジェクトの推進を掲げており、複数の市町村が連携を図り、総合的に取り組むプロジェクトを支援してゆくものとしている。この地域プロジェクトの中には、河川事業に直接あるいは間接的に関連するものも少なくない。



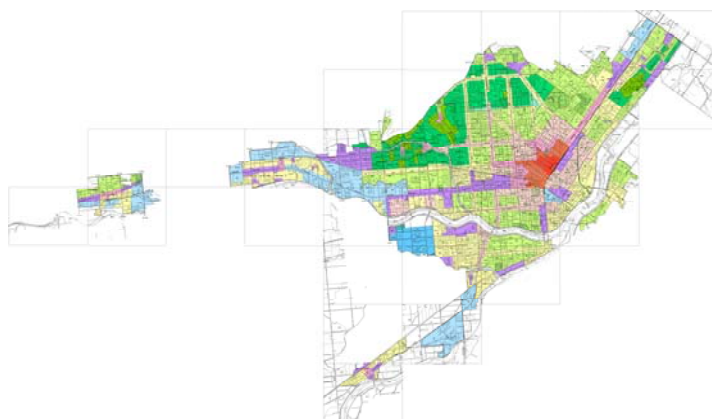
3-5-2 都市計画

常呂川流域の市町村は、北見市・訓子府町・置戸町の1市2町となっている。常呂川流域の上下流に渡って位置する北見市は、北見市街と留辺蘂地区、温根湯地区の合計16,434haが都市計画区域に指定されている。

北見市街は、常呂川及び無加川を中心に北見盆地に形成された市街地であり、15,405haが都市計画区域に指定されている。用途地域は、北見駅周辺の中心市街地を配置しその周辺を一般市街地とし、北光社地区と東相内地区から北見市街西部に工業系の土地利用が配置されている。

留辺蘂地区、温根湯地区は無加川に沿って形成されており、1,029haが都市計画区域に指定されている。

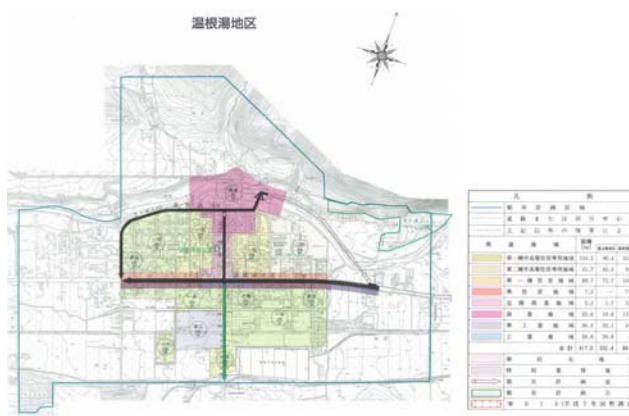
なお、訓子府町・置戸町は都市計画区域が指定されていない。



北見市街都市計画図



留辺蘂地区都市計画図



温根湯地区都市計画図

4.水害と治水事業の沿革

4-1 既往洪水の概要

常呂川流域では過去に以下に示す洪水が発生している。

表 4-1 既往の主要洪水の概要

洪水発生年月日	気象原因	流域平均 48 時間雨量 北見地点(mm)	北見地点流量 (m^3/s)	被害等
大正 11 年 8 月	台風	182.1	1610(推定)	被害家屋(戸) 1093 氾濫面積(ha) 2160
昭和 46 年 10 月	低気圧	60.6	261	被害家屋(戸) 24 氾濫面積(ha) 411
昭和 50 年 8 月	台風	153.2	661	被害家屋(戸) 349 氾濫面積(ha) 494
昭和 50 年 9 月	低気圧・前線	76.7	508	被害家屋(戸) 1060 氾濫面積(ha) 1111
昭和 54 年 10 月	台風	101.6	586	被害家屋(戸) 277 氾濫面積(ha) 592
昭和 56 年 8 月上	台風	113.3	390	被害家屋(戸) 0 氾濫面積(ha) 2072
昭和 56 年 8 月下	台風	43.7	150	被害家屋(戸) 8 氾濫面積(ha) 1070
平成 4 年 8 月	台風	88.8	364	被害家屋(戸) 6 氾濫面積(ha) 352
平成 4 年 9 月	台風	94.6	671	被害家屋(戸) 26 氾濫面積(ha) 4585
平成 10 年 8 月	前線	126.0	635	被害家屋(戸) 11 氾濫面積(ha) 0
平成 10 年 9 月	台風	101.4	898	被害家屋(戸) 8 氾濫面積(ha) 0
平成 13 年 9 月	台風	175.0	932	被害家屋(戸) 2 氾濫面積(ha) 1037

注 1) 被害家屋及び氾濫面積は昭和 23 年以前は「水害」、昭和 54 年以降は「北海道災害記録」による。

注 2) 北海道災害記録による被害等は集計上、支川、内水被害を含む。北見市の被害は流域外も含む。

4-2 主な洪水の概要

主な水害は以下の通りである。常呂川の既往最大は大正11年8月洪水である。

表 4-2 主な洪水の概要表 被害実態(1)

洪水発生 年月	被害の概要
大正11年 8月洪水	8月下旬から降雨つづきのところへ、24日にいたって台風が根釧国境を通過して、オホーツク海へ抜けたため豪雨となり、翌25日にかけて全道的に河川が氾濫、大災害となった。 「北海道地域防災計画」より 全道で死者117名、浸水家屋21,597戸、同流失872戸、田畑87,975ha、同流失646ha、損害額2,715万円 「釧路町史 戦前編」より 降水量・北見283.9mm、家屋流失21、同浸水1,093戸、橋梁流失37箇所、田畑浸水2,160ha 「新留辺蘆町史」より 無加川をはじめ各河川が氾濫し、橋梁流失、道路決壊、畑地冠水などの大水害を生じた。町は災害復旧のため8月27日及び9月20日に町会を招集、災害関係の議会上程した。町議会はとりえず主要三橋の復旧計画を立て、この促進を期したが財政措置上から緊急着工に至らず、ついに同年12月28日町会を招集し、一時借り入れ5千円の議決を取り、銀行融資を受ける一方緊急を要する武草橋水害復旧工事について、工事費14,554円をもって留辺蘆元部落住民一同と工事随意契約の書面議決を採って、工事に着手した。このほか一糸橋、二糸橋共に道費補助、町費、受益者の寄付金でいずれも架橋された。 「新端野町史」より 大正11年8月23日からの豪雨は、常呂川水系の河川を氾濫させ、流域は泥沼と化した。この洪水で、鉄橋下手から一区にかけて常呂川の河川が変わり、肥沃地200町歩が流失し、新しい川(新川)ができた。 網走支庁管内における浸水家屋数は4,400戸、流失家屋数は65戸、田への浸水・流失面積は241町歩、畑への浸水面積は13,586町歩(うち収穫皆無1,801町歩)、畑の流失面積も1,482町歩に達した。 「続訓子府町史」より 大正11年は、8月上旬と下旬に300ミリの豪雨、9月にも大雨が降って、3度の洪水に見舞われ、被害の手当てが行なわれないうちに洪水を重ねたため、妻恋橋、大谷橋、三十号橋など多数を流し、道路、堤防、農作物の損害10万3千円、決壊した田畑132町8反歩に及んだと記録されている。(常呂川流域97町1反歩、ケトナイ川流域11町歩、シルコマベツ川流域10町7反歩、クネネツ川流域14町歩)この水害で居武士今野新兵衛ら12戸、東訓田島作松ら4戸、南訓宮崎九朗丸ら3戸、中ノ沢森谷常蔵の計20戸が戸数割の免除を受けている。 「常呂川百年史」より 建物浸水4,400戸、流失227戸、死者11人、家畜死1,116、耕地被害水田浸水237町歩、流失2町歩、畑浸水13,450町歩、流失1,467町歩
昭和10年 8月洪水	8月29日東北地方に達した低気圧は、さらに東北に進行して本道の南部を通過し、30日は根室沖に滞留したため、この低気圧の通過区域にあたった空知、胆振、十勝、釧路、網走の各支庁管内は、29日より30日にかけて暴風と大豪雨に襲われ、降水量は帯広105mm、釧路100mm、網走157mmの多きに達した。 「北海道地域防災計画」より 空知、十勝、網走の4支庁、45町村で死者14名、家屋7,443戸のうち浸水2,074戸、被害総額430万6千円 「釧路町史 戦前編」より 降水量・北見81mm(29日)、北見家屋浸水、常呂川の堤防決壊 「新端野町史」より 6月8日と8月30日の2回の水害で仁頃川、常呂川の氾濫により麦類、薄荷などを中心に合わせて277町4反(約274.6ha)が被害を受け、約4万2千円の損害を出した。 8月29日午後8時ごろから30日午前4時ごろまでの豪雨で30日午前9時ごろから常呂川及び仁頃川で出水が始まり、午後3時になると水位が2.6メートルに達して沿岸耕地に流入し、浸水による腐敗等のため流域農地一帯の水田8.7町歩が収穫皆無となり、畑219町歩が4～8割の減収となった。
昭和14年 8月洪水	昭和14年8月15日から17までの3日間、台風による暴風雨が北見地方を襲い大きな被害をもたらした。雨量は、野付牛(北見)で64mm、佐呂間で110mmであったが、風をともなった関係で出水がはやく、常呂川をはじめ網走管内の各河川が氾濫した。 「北海道地域防災計画」より 北見地方で死者1名、家畜51頭、家屋流失22戸、浸水1,262、田畑流失3,300ha、被害額85万6千円 「釧路町史 戦前編」より 降水量・北見64mm、佐呂間110mm(15～16日)、死者1名、家畜喪失51頭、家屋半壊流失22、床上浸水229、床下同1,033戸、田畑浸水流失3,300ha、被害額85万円 「新端野町史」より 4月23日から30日にかけて融雪による常呂川、仁頃川などの氾濫で田15町(約14.9ha)、畑80町(約79.2ha)にわたって表土流失、砂礫の地中沈下などの被害を受けた。このため薄荷、小麦など55町(約54.5ha)に1万5百円の被害が発生した。
昭和22年 9月洪水	カスリン台風による暴風雨。 「北海道地域防災計画」より 全道で行方不明1、死10、家屋倒壊33、流失20、浸水7,288戸、田畑冠水7,261ha、橋流失194、堤防欠壊75 「続訓子府町史」より 本町でも昭和22年9月の豪雨で、前年によくやく復旧したばかりの居武士橋の橋脚の一部が流失したが、このような場合、復旧できぬまま放置して仮橋で間に合わせたり、地域住民の手でかろうじて復旧するにとどまった。
昭和32年 5月洪水	昭和32年5月20日から21日にかけて本道南方を通過した低気圧は、網走管内に大雨をもたらし、北見で82mm、網走66mm、佐呂間143mmに達し、常呂川・網走川・佐呂間別川・芭蕉川などが氾濫した。 「北海道地域防災計画」より 北見地方で常呂川他が氾濫、浸水家屋260戸、田畑冠水1,000ha 「釧路町史 戦後編」より 緑橋上流左岸決壊200m 「続訓子府町史」より 昭和32年5月20日から21日にかけて大雨があり、常呂川が氾濫した。しかし、本町の被害状況はあきらかでない。 「新端野町史」より 5月20日～25日の降雨で常呂川、仁頃川氾濫し農地冠水・流失260町歩、橋流失3、道路欠損5。 「常呂町百年史」より 32年5月22日には大雨で水位が2.6mも上昇、昭和11年以来の増水で川口堤防の一部が決壊、福山愛林小貫橋が流失した。

表 4-3 主な洪水の概要表 被害実態(2)

洪水発生年月	被害の概要
昭和37年 8月洪水	7月下旬以来、北日本付近に停滞していた梅雨前線の北上によって、8月2日夜半から全道的に強い雨が降り続き、台風9号の接近にともなって雨量はさらに増大し、とくに、後志、石狩、空知および上川南部は集中的な豪雨となり、その最高雨量は、後志地方においては358mmを記録した。このため、石狩川、空知川をはじめ、各地の大小河川が増水氾濫し、さらに8月9日には台風10号による降雨が道南一帯及び道央の一部にあって、雨台風により各地に大きな被害が発生した。 「水害統計」より 浸水面積：3151.0ha 建物被害：125棟 「北海道地域防災計画」より 全道で行方不明35、傷39、全壊家屋163、流失375、半壊1,358、床上浸水16,373、床下浸水32,372、非住家破壊18,315戸、田畑被害240,909ha、河川2,712、道路1,072、橋564カ所欠壊、漁船40、漁港施設104件被災、その他、被害総額75,883,133千円（一部10号被害含む） 「新留辺蘆町史」より 本町の橋梁流失、河川堤防決壊、農作物の流失被害など膨大な額に上った。流失橋梁に対する災害復旧工事は、同年9月21日召集の町議会で施行議決がなされ、「台風9号災害公共土木工事特別会計」を設定、歳入財源に国庫支出金1,600万円、一般会計繰り入れ226万八千円、町債450万円、合計2,376万8千円を計上した。 「続訓子府町史」より 常呂川流域の雨量は、本町で98mmに達し、本町で、農地943.2ha（水田15ha、畑928.2ha）床上浸水1戸、床下浸水23戸、24世帯、125人が被害を受け、河川堤防4カ所が決壊、道路1ヶ所が壊れ、総額で3,400万2千円の損害を出した。 「新端野町史」より 8月4日の台風9号の影響で、田畑166ha冠水を含めて被害面積2,268haの農作物に被害をもたらす。農作物被害金額2,328万円。 「常呂町百年史」より 37年8月3日には台風9号の襲来で、常呂町では、被災総面積2,521.4ha、（その中水田41.5ha、畑2,479.9ha）、床上浸水44戸、床下浸水8戸、被災人口302人、道路及橋梁2カ所、被害総額2億6,759万4,000円に達する被害を受けた。
昭和50年 8月洪水	22日夜半すぎから北海道に停滞していた前線は、台風6号が八戸の東海上に達した24日零時頃からやっと南東に移動し始め、24日9時には北海道の東海上に去った。強い雨域はこの前線の移動によって道東に移ったので、西部では早朝、東部でも午前中にはほとんど雨が止んだ。台風6号は24日6時釧路の南東海上で温帯低気圧となり、9時には1,000ミリバールに衰えた。このため北海道では風はあまり強くなり、風による被害はほとんどなかった。したがって、今回の台風6号は雨台風ということが出来る。 常呂川流域においてももっとも雨が早く降り始めたのは、上無加・留辺蘆における23日7時で、遅いのは置戸・常呂での23日14時～15時であり、1時間最大雨量は釧山での193mm、置戸の187mmが多く、流域平均雨量は134.5mmとなっている。 「水害統計」より 浸水面積：442.9ha 建物被害：527棟 「災害記録」より 浸水面積：494.0ha [常呂町・置戸町] 住宅被害：349棟 [常呂町・北見市・訓子府町・置戸町・留辺蘆町] [北海道地域防災計画]より 全道で交通関係・国鉄運休1,271本以上、主要道路不通または通行止。建物・住家全壊34、半壊、一部破壊53、非住家全壊2棟。浸水家屋・床上6,294、床下16,503。農業・農耕地冠水51,407、埋没1,016、海難・漁船沈没1。人身事故・死者、行方不明など12、負傷者7。電力関係・電柱折損39、停電4,000。土木関係・道路冠水、損壊など602、がけ崩れ136、堤防決壊63、鉄道冠水29、橋流失83。その他・回線障害86、家畜被害940万。 「置戸町史 戦後編」より 台風6号によりイモ、玉ネギ等の農作物に被害（226ha、1億3,395万円）を受けたほか、住宅全壊1、床上浸水42棟、床下浸水142棟、非住宅で全壊11棟、半壊5棟、河川23ヶ所、道路20カ所、橋梁10ヶ所、公共施設1ヶ所、農地被災面積309haの被害。 「新留辺蘆町史」より 住家被害、床上浸水6棟、7世帯、20名、床下浸水27棟、50世帯、159名、畑の冠水は123ha、流失・埋没は37haで、被害総面積は160haに及んだ。土木被害の主な被害では河川7カ所、その他小さな被害を入れると40カ所あまりで、被害金額は合わせて約5,100万円に上った。 無加川を横断している送水管が破損し、25日から27日まで断水した。 「続訓子府町史」より この大雨災害で訓子府町は、床下浸水90戸（360人）、河川堤防2カ所道路及び橋梁2カ所、合計2億2,600万3千円の被害を出したが、この時叶橋の橋脚が流され、「新端野町史」より 8月23・24日、台風6号に伴う大雨で農地冠水流失等のため農作物に被害のほか、二区地区で住居の床下浸水、道路損壊などの被害 「常呂川百年史」より 台風6号では、田畑被災280ha、浸水12戸、48人、被害額8,692万5,000円の被害。
昭和50年 9月洪水	昭和50年夏の亜熱帯高気圧は、例年になくその勢力が強く、9月には入っても一向に衰える様子を見せず、本州から北日本方面まで張り出していた。一方、オホーツク海北部には冷たい高気圧が現れ、南に張り出し停滞していた。これら2つの高気圧の間に位置する北海道は前線が停滞しやすい場となった。この前線は北海道の中央部をほぼ東西に横切って停滞したが、この前線上を1～2日ぐらいの短い周期で、亜熱帯高気圧の周辺を回る暖湿気流が北海道に流入したため、大気の成層状態が不安定化し、前線活動が活発になった。このように北海道に大雨が降りやすい気象状態は9日朝まで続いた。 「水害統計」より 浸水面積：496.1ha 建物被害：34,544棟 「災害記録」より 浸水面積：1,111.0ha [端野町・北見市・訓子府町・置戸町・留辺蘆町] 住宅被害：1,060棟 [常呂町・端野町・北見市・訓子府町・置戸町・留辺蘆町] 「北海道地域防災計画」より 全道で交通関係・国鉄運休834本、主要道路不通。建物・全壊15、半壊31、非住家全壊13棟。浸水家屋・床上632、床下3,862。農業・農耕地冠水16,552、埋没644、農作物冠水27。海難・漁船破損4、人身事故・死者2、負傷者7。土木関係・道路冠水、損壊等414、がけ崩れ46、決壊・護岸4、堤防23、鉄道冠水98、橋流失65、その他、回線障害3、断水事故。 「置戸町史 戦後編」より 8日より9日までに108mmを記録し、住宅で全壊1、床上浸水35棟、床下浸水157棟、非住宅で全壊2棟、半壊1棟、河川4カ所、道路69カ所、橋梁2カ所、公共施設8カ所、農地等被災面積230haの被害 「続訓子府町史」より この大雨災害で訓子府町は床上浸水3戸、床下浸水88戸、被害人口360人、家屋半壊1戸、被害農地244ha（田26ha、畑218ha）、河川堤防決壊3カ所で被害総額は3億1,696万7千円に達した。 「新端野町史」より 9月8日から9日にかけての94mmの集中豪雨で常呂川・仁頃川が氾濫し、流域の農地冠水、農作物被害のほか道路損壊等の被害 「常呂川百年史」より 大雨では、被災農地419ha、浸水11戸、被害額1億9,126万6,000円を生じた。

表 4-4 主な洪水の概要表 被害実態(3)

洪水発生 年月	被害の概要
平成 4 年 9 月洪水	北海道付近に停滞している前線が活発となり、また、9月10日午後3時現在、八丈島の東約410kmにある大型で強い台風17号は、勢力を保ちながらさらに北上を続け、9月12日0時には国後島付近を通過しオホーツク海へ抜けた。網走地方気象台は、9月11日12時50分網走、北見地方に大雨洪水警報、さらに11日19時30分紋別地方にも大雨洪水警報を発令した。その後も強い雨が、継続的に12日早朝まで続き、降り始めからの総雨量は、網走(気)214mm、津別(開)170mm、美幌峠(開)191mm、上川沿(開)161mm、北見(開)123mm、中湧別(開)129mm、上着滑(開)111mmとなった。 「水害統計」より 浸水面積：2485.6ha 建物被害：27棟 「災害記録」より 浸水面積：4584.6ha [常呂町・端野町・北見市・訓子府町・置戸町・留辺蕊町] 住宅被害：26棟 [常呂町・北見市・留辺蕊町] 「続訓子府町史」より ポンケトナイ川が決壊、道路が冠水した。しかし住宅の浸水を免れ、幸うじて危機を脱した。オロムシ川は危険水位に達したが、消防署員と団員が出動、つかえた流木を流して決壊を防止した。シルコマンベツ川では、川辺の牛舎への流水の浸食があり、同舎の半壊をみた。この水害によって、農作物の流失・冠水、農業施設の損壊、土木被害など、被害総額が2億5,900万円に達した。
平成10年 8 月洪水	日本の東には湿った太平洋高気圧、西には大陸の冷たい高気圧があって日本付近は深い気圧の谷の中に入り、日本列島に沿って発達した前線が停滞した。また、25日から北緯24度付近を発達しながら東進した台風4号は、27日には中型で強い台風となって東経140度付近で北上をはじめ、前線の活動はさらに活発となった。北海道では活発な前線は27日から30日にかけて太平洋岸からオホーツク海を機切るかたちで停滞した。このため、網走管内では27日夜から雨が降り始め、28日朝5時から29日朝9時にかけて断続的に強い雨が降り、28日15時50分に紋別地方に大雨洪水警報が、28日19時30分には網走・北見地方にも大雨洪水警報が発令された。その後も台風4号は東経140度付近をゆっくりと北上し、前線も30日まで以前として太平洋沿岸に停滞したが、前線が太平洋沖に東進したため網走管内では29日10時から雨は小降りになり、29日12時40分には大雨警報が解除され、17時10分には洪水警報も解除された。降り始めの27日19時から29日24時までの総雨量は、チミケップ山で147mm、北見で125mm、網走で118mm、常呂で134mm、佐呂間で138mm、生田原で128mm、斜里で144mmなど網走管内東部で大雨となった。 「水害統計」より 浸水面積：0.2ha 建物被害：10棟 「災害記録」より 住宅被害：11棟 [常呂町・北見市・置戸町・留辺蕊町]
平成10年 9 月洪水	平成10年9月16日午前4時ごろ静岡県御前崎付近に上陸した台風5号は、関東地方を北上し、16日正午ごろには仙台市付近を通過し、いったん三陸沖海上に出た後、16日午後8時すぎ釧路市付近に再上陸した。その後は北北東に進路を進め16日深夜に根室沖の海上に抜けた。常呂川流域においては、下流域の上川沿で72mm、中流域の北見で92mm、上流域の置戸で127mmの大雨となった。この豪雨により河川は急激に増水し、中流部の北見や下流域の上川沿の各観測所で洪水水位が警戒水位を超えて計画高水位に近づいた。 「水害統計」より 浸水面積：2.1ha 建物被害：12棟 「災害記録」より 住宅被害：8棟 [常呂町・訓子府町・置戸町・留辺蕊町] 「北海道地域防災計画」より 全道で死者2名、重傷者3名、軽傷者2名、家屋被害1,100棟、被害総額40,396,892千円。
平成13年 9 月洪水	北海道に停滞していた秋雨前線が、台風15号の接近に伴って活動が活発となり網走、北見、紋別地方では広範囲にわたって200mmから280mmの大雨となった。10日から北海道付近に停滞していた秋雨前線の影響で、雄武や興部など北部では10日の早朝から雨が降り出していた。秋雨前線は10日の夕方には徐々に南下を始めため、雨の範囲はオホーツク海側一帯に広がり、台風15号からの暖湿気流によって前線の活動は更に活発化した。台風15号は11日の午前9時ごろに神奈川県鎌倉市付近に上陸し、夜には再び宮古市付近から太平洋に進んだ。その後徐々に速度を上げて12日朝には釧路市の南東海上を通過して、午後3時に千島近海で温帯低気圧に変わった。これら、秋雨前線と台風15号の影響で、管内では3日間に渡って雨が降り、ピヤシリ山で279mm、滝上242mm、藻別233mm、網走でも211mmなど各地で200mmを超える大雨を観測した。 「水害統計」より 浸水面積：88.1ha 建物被害：1棟

出典

「水害統計」国土交通省河川局
「災害記録」北海道
「北海道地域防災計画」平成14年3月発行 北海道防災会議
「置戸町史 戦前編」昭和60年8月発行 置戸町
「置戸町史 戦後編」昭和62年12月発行 置戸町
「新留辺蕊町史」昭和60年3月発行 留辺蕊町
「続訓子府町史」平成10年発行 訓子府町
「常呂町百年史」平成元年3月発行 常呂町
「新端野町史」平成10年10月発行 端野町

4-3 治水事業の沿革

明治 31 年、北海道庁内に治水調査会が設置され、常呂川は大正 2 年に 3 ヶ所の水位観測所の設置とともに河川調査が行われた。設計調査は大正 4 年より実施され大正 11 年に終了している。

大正 8 年、常呂川治水事業は道会を通過し大正 9 年帝国議会の協賛を得て、大正 10 年度より起工の運びとなった。この第一期拓殖計画期の工事により、下流部は堤防がほぼ完成し、予期以上の成果をあげた。しかし、洪水量の激増により設計の改訂を要した。また、大正 8 年 9 月の洪水実績をもとに、河口における計画高水流量を $1,391 \text{ m}^3/\text{s}$ (50,000 立方尺/秒) として治水計画を樹立した。

昭和 28 年、常呂川改修総体計画が取りまとめられ、昭和 32 年に昭和 33 年度移行改修総体計画立案のため、大正 11 年 8 月 25 日の降雨量からの流出量と北見地点での洪水痕跡から計画高水流量は $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ と決定された。現在は昭和 43 年一級河川指定に基づき、工事実施基本計画が決定され、鹿ノ子ダムの調節量を考慮し、計画高水流量を $1,600 \text{ m}^3/\text{s}$ とし事業が進められている。

昭和 2 年、第二期拓殖計画の樹立にあたり、本工事の従来の実績、ならびに大正 11 年 8 月の洪水実績をもとに、河口における計画高水流量を $2,086 \text{ m}^3/\text{s}$ (75,000 立方尺/秒) に改定した。

その結果、築堤盛高の増高、工事施行区域の拡大等、既定設計の変更、拡張を必要とするに至った。しかし、下流部の工事に主力が注がれたため、上流部は応急的に行われた工事の後始末的な堤防工事の仕上げが施行されたにすぎなかった。

その後、常呂川総体計画の立案にあたり、昭和 32 年に計画を見直し、北見における計画高水流量を約 $1,100 \text{ m}^3/\text{s}$ から $1,500 \text{ m}^3/\text{s}$ にした。

その後、昭和 40 年の河川法施行を受け、昭和 43 年に北見地点で基本高水流量を $1,900 \text{ m}^3/\text{s}$ 、計画高水流量を $1,600 \text{ m}^3/\text{s}$ とし、 $300 \text{ m}^3/\text{s}$ を洪水調節施設により調節する工事実施基本計画を策定し、河道の掘削、

堤防の新築及び拡築、護岸設置等を実施してきた。

また、この計画に基づき、昭和 50 年に鹿ノ子ダムの建設に着手し、昭和 58 年に完成させた。

その後、河道掘削等を継続してきたが平成 4 年 9 月洪水や平成 13 年 9 月洪水等で大きな被害を受け、以後、現在まで築堤の完成化や河道掘削等を実施している。

表 4-5 治水事業年譜

関連事業	年代	治水史
北海道第1期拓殖計画 (明治43年～昭和元年)	1889 (W22)	常呂川河口の渡船を廃止し、木橋架設
	1896 (W29)	河川法公布
	1898 (W31)	全道的に大洪水(常呂川氾濫し下常呂原野泥海と化す)
	1900 (W33)	拓殖10年計画が道会において可決され、常呂川の治水事業費が計上された
	1907 (W40)	網走土木派出所が設置
	1913 (T 2)	常呂川の平面測量を開始(大正7年完了)
	1918 (T 7)	常呂川治水計画を樹立
	1921 (T10)	釧路川常呂川治水事務所を釧路市に設置 常呂川治水工場を設置
北海道第2期拓殖計画 (昭和2年～昭和21年)	1928 (S 3)	下流部常呂左右岸築堤、常呂市街裏護岸工事を完了
	1930 (S 5)	上流部の治水工事の測量を開始
	1934 (S 9)	本道河川に河川法が適用され、常呂川も認定河川となる
	1949 (S24)	常呂川北見改修事業所が設置される
戦後の空白時代 (昭和22年～昭和26年)	1951 (S26)	北海道開発局が発足、網走開発建設部が設置される
	1953 (S28)	北見左岸築堤が完成
第1期北海道総合開発計画 (昭和27年～昭和37年)	1956 (S31)	訓子府左岸築堤が完了
	1960 (S35)	常呂川常呂改修事業所に変更し、北見詰所となる
第2期北海道総合開発計画 (昭和38年～昭和45年)	1964 (S39)	常呂川水質基準が決定される
	1967 (S42)	北見詰所が常呂川北見改修事業所に変更される 常呂川が一級河川に指定される
第3期北海道総合開発計画 (昭和46年～昭和55年)	1968 (S43)	鹿ノ子ダム予備調査を開始
	1971 (S46)	端野左岸築堤が既成完了
	1973 (S48)	上常呂右岸築堤が完了
	1975 (S50)	鹿ノ子ダム建設工事を開始
	1978 (S53)	無加川右岸護岸工事が完了
	1979 (S54)	上常呂左岸築堤が完成
	1983 (S58)	鹿ノ子ダムの竣工式が行われる
	1986 (S61)	常呂川第1頭首工、林友橋が完成
第4期北海道総合開発計画 (昭和56年～昭和65年)	1989 (H 1)	常呂川第2頭首工に着手(平成10年完了)
	1990 (H 2)	北見市において桜つつみモデル事業認定(平成4年完了)
	1993 (H 5)	福山右岸築堤(漏水対策工)着手(平成11年完了)
	1994 (H 6)	訓子町町において桜つつみモデル事業認定(平成10年完了)
	1996 (H 8)	直戸町において桜つつみモデル事業認定(平成11年完了)
	1997 (H 9)	河川法改正
	1998 (H10)	河川管理用光ファイバーネットワーク事業着手
	2001 (H13)	端野橋架替工事着手
第九次治水七ヶ年計画 (平成9年～平成15年)	2002 (H14)	オホーツク水防公開演習
		第二期水環境改善緊急行動計画 (清流ルネッサンスII)に選定

※ 網走4河川治水事業概要より

5. 水利用の現状

5-1 水利用の実態

常呂川の河川水の利用については、明治の開拓農民による農業用水の利用に始まり、現在では農業用水や水道用水、工業用水等に利用されている。

上水道、工業用水等の水需要の増大に対処する一方、農業構造改善事業にともなう用水の統廃合、農業政策の変更による農業水利の改変等、水利使用相互の調整を積極的に進め有効利用を図っている。

表 5-1に常呂川水系の水利用状況を示す。

表 5-1 水利用(現況)

種別	件数	取水量 (m ³ /s)
かんがい用水 (かんがい面積:6,573.1ha)	164	18.90
水道用水	9	0.94
工業用水	2	0.39
その他	3	0.69
小計	178	20.92
発電用水	0	
合計	178	20.92

※ 一級水系水利権調書(北海道開発局)平成 18 年 4 月現在

現在の許可水利権は北海道開発局、北海道合わせて 178 件あり、最大取水量の合計は約 20.92m³/s である。全体の約 90%を農業用水が占めており、約 6,600ha の耕地の灌漑に利用されている。また、水道用水は計 9 件で約 0.94 m³/s であり、流域内市町への上水道として利用されている。

6. 河川流況及び水質

6-1 河川流況

北見地点における流況は表 6-1のとおり、昭和45年から平成16年までの35年間の平均で、低水流量約9.8 m³/s、渇水流量約6.9m³/s となっている。

表 6-1 北見地点における流況表

年	データ数	欠測数	最大	豊水	平水	低水	渇水	最小	平均
S45	365	—	153.01	11.78	9.54	8.54	4.73	3.37	17.66
S46	365	—	221.44	26.58	16.16	8.14	6.29	5.86	21.64
S47	366	—	174.92	24.62	14.80	9.08	5.90	3.75	23.13
S48	365	—	194.44	40.03	18.55	11.83	6.45	4.14	32.76
S49	365	—	212.01	33.22	19.97	12.80	8.96	5.53	28.96
S50	365	—	525.85	44.81	25.06	12.45	8.22	7.24	43.97
S51	366	—	165.82	16.61	10.48	8.37	6.16	4.87	16.60
S52	365	—	118.95	18.63	10.56	8.92	6.98	6.62	19.07
S53	365	—	149.62	19.94	12.31	9.00	7.31	7.02	20.39
S54	365	—	338.30	29.24	13.48	9.03	6.69	5.86	24.46
S55	366	—	86.55	19.09	13.44	10.53	6.78	6.41	18.59
S56	359	6	305.94	27.81	14.00	9.07	7.86	4.85	23.79
S57	365	—	88.15	19.59	11.74	9.53	6.23	5.13	17.96
S58	365	—	106.20	17.42	10.68	8.64	6.40	4.26	15.57
S59	366	—	85.12	11.99	8.92	7.38	5.36	4.72	15.00
S60	365	—	83.00	16.23	9.62	7.24	5.96	5.23	14.98
S61	365	—	105.89	16.64	9.46	8.50	7.03	5.26	15.60
S62	365	—	68.02	14.56	9.72	8.06	5.15	4.83	13.39
S63	366	—	170.39	17.88	10.10	8.41	4.68	3.53	15.97
H 1	365	—	250.69	21.42	12.18	9.57	7.31	6.14	21.14
H 2	365	—	145.20	32.52	18.40	8.96	6.40	5.56	25.21
H 3	365	—	70.87	16.01	12.75	10.86	7.76	5.98	16.48
H 4	366	—	401.21	23.97	16.89	10.54	6.16	4.64	23.05
H 5	365	—	89.54	27.22	15.23	11.85	9.27	7.02	22.66
H 6	365	—	419.17	25.06	13.01	10.87	4.83	4.13	25.20
H 7	365	—	126.13	31.91	19.28	13.68	10.11	9.74	24.63
H 8	366	—	105.77	22.66	13.78	11.17	7.46	5.89	20.49
H 9	365	—	120.63	22.25	14.43	9.07	7.56	7.42	18.57
H10	365	—	515.89	21.55	16.76	11.91	8.12	8.11	27.03
H11	365	—	136.44	14.57	11.82	10.29	6.00	6.00	18.84
H12	366	—	276.44	32.73	14.38	8.51	5.18	4.05	26.41
H13	365	—	718.58	27.19	15.49	10.22	7.87	7.37	27.54
H14	365	—	299.83	22.65	14.75	10.89	8.49	7.00	21.55
H15	365	—	256.30	17.40	11.74	9.11	6.58	5.92	18.62
H16	366	—	133.82	23.15	11.97	10.54	8.58	7.02	22.96
最大値			718.58	44.81	25.06	13.68	10.11	9.74	43.97
平均値			212.00	23.11	13.76	9.82	6.88	5.73	21.71
最小値			68.02	11.78	8.92	7.24	4.68	3.37	13.39
近年35年間(S45～H16)第3位			83.00	14.56	9.54	8.06	4.83	3.75	15.00
近年30年間(S50～H16)第3位			83.00	14.57	9.62	8.06	5.15	4.13	15.00
近年20年間(S60～H16)第2位			70.87	14.57	9.62	8.06	4.83	4.05	14.98
近年10年間(H 7～H16)第1位			105.77	14.57	11.74	8.51	5.18	4.05	18.57

注)流域面積:1,394.2km²

なお、統計期間は流量観測が行われている期間のうち、時刻流量が整理され、日平均値の信頼性の高い期間とした。

6-2 河川水質

常呂川水系における水質汚濁にかかわる環境基準の類型指定は表 6-2、図 6-1に示すとおりであり、北見市取水口より上流側は A 類型、下流側は B 類型に指定されている。

基準地点は忠志橋と金比羅橋、補助基準点は上川治と若松橋、無加川の常盤橋であり、それぞれ公共用水域の水質測定計画に基づき、水質測定が行われている。

現況水質のうち、BOD75%は図 6-2に示すように概ね環境基準値を下回る程度で推移している。

表 6-2 環境基準類型指定状況(昭和 45 年 9 月 1 日指定(閣議決定))

水域の範囲	類型	達成期間	環境基準地点名
常呂川上流(北見市取水口より上流)	A	イ	金比羅橋(上常呂)
常呂川下流(北見市取水口より下流)	B	ロ	忠志橋

※ イ：直ちに達成、ロ：5 年以内で可及的速やかに達成

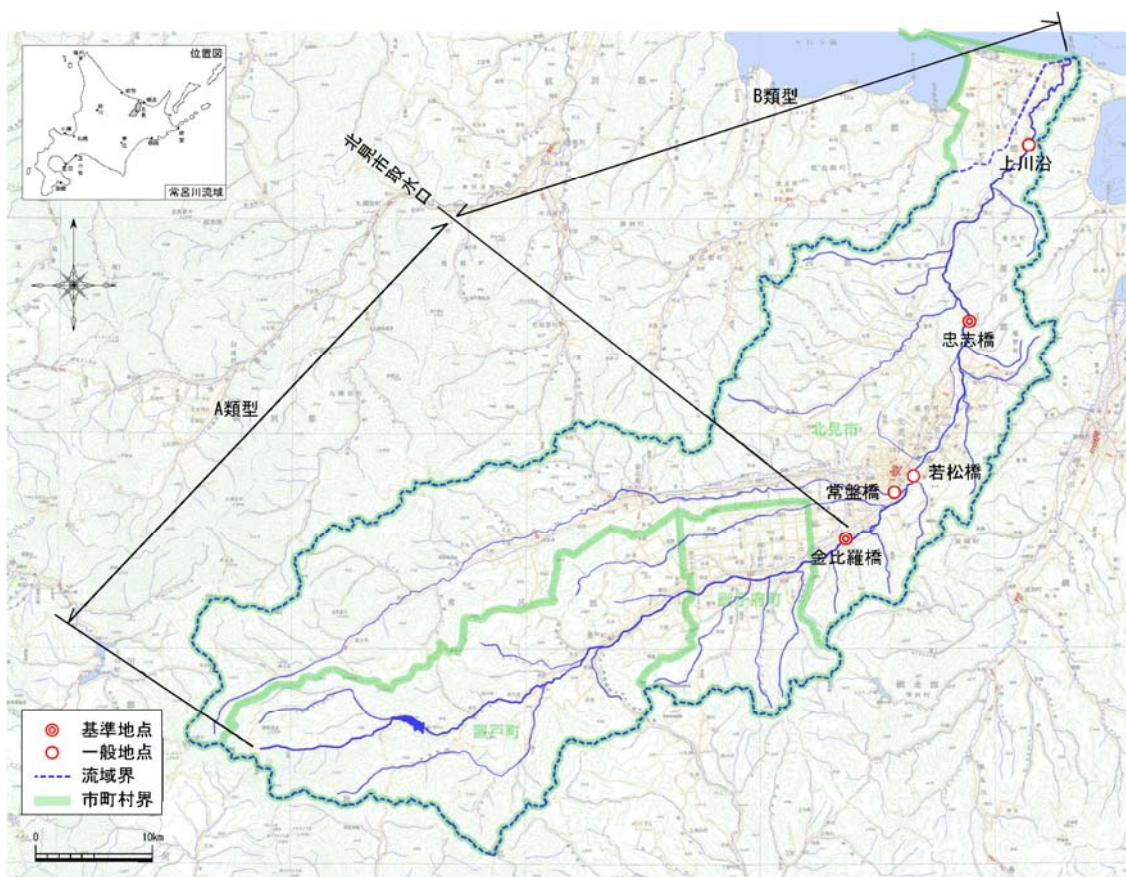


図 6-1 常呂川水系水質環境基準地点および類型指定区間

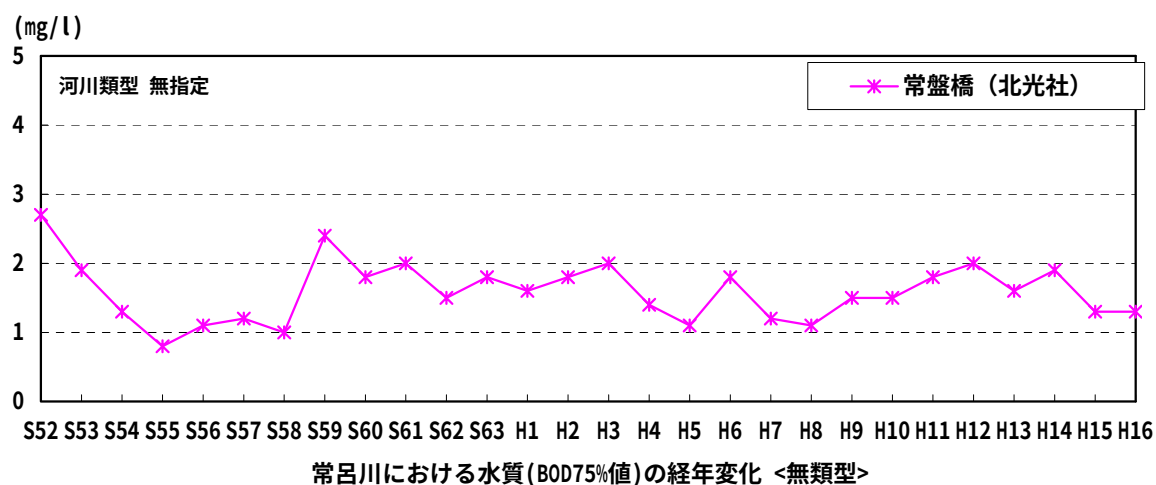
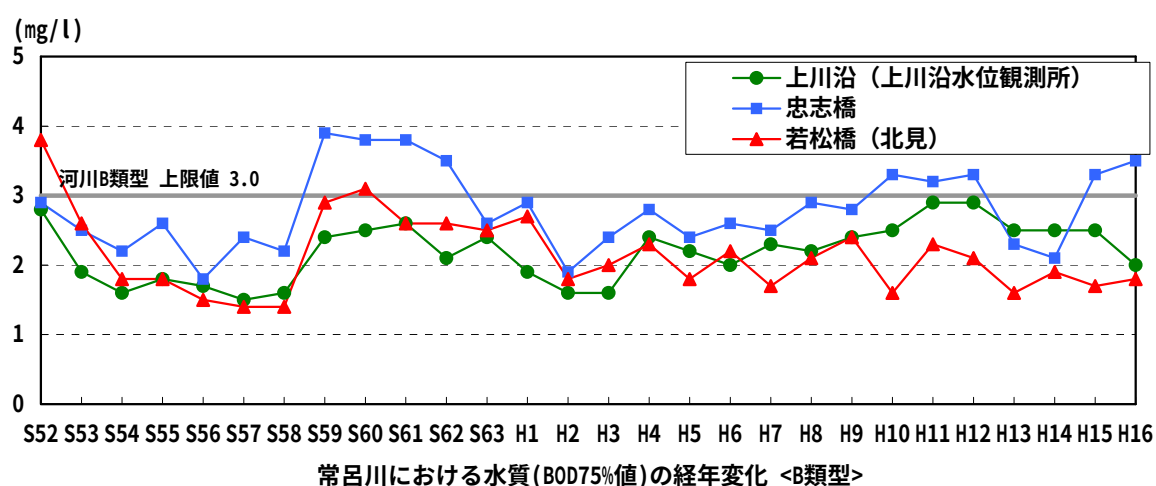
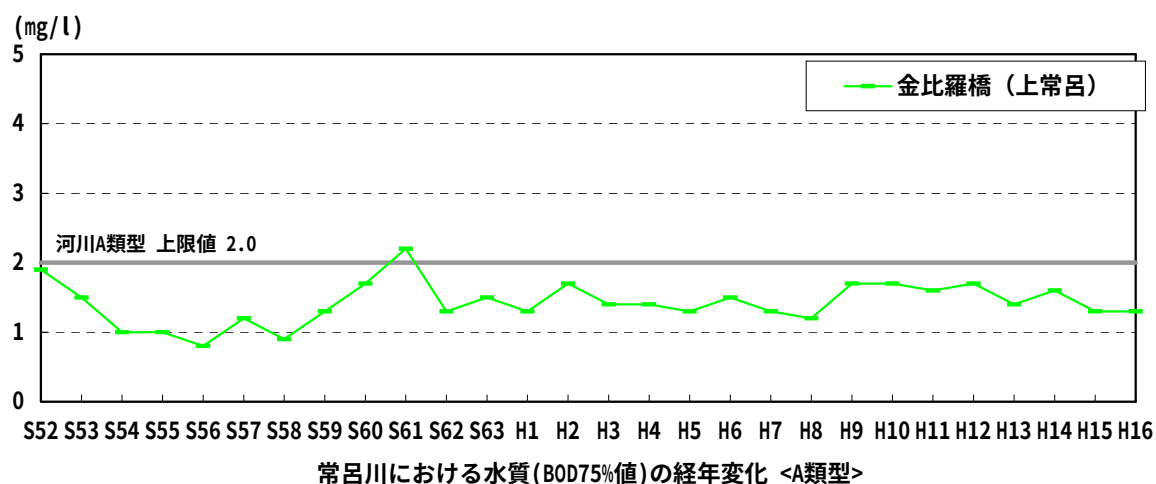


図 6-2 常呂川における水質(BOD75%値)の経年変化

7.河川空間への利用状況

7-1 河川敷等の利用状況

7-1-1 河川敷地の利用状況

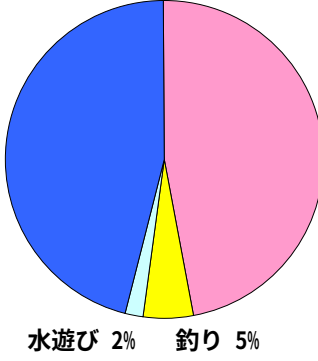
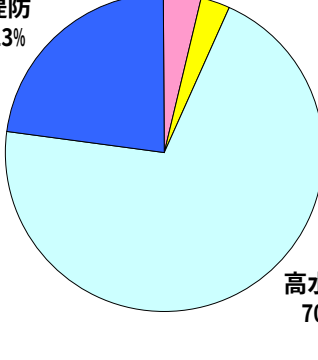
常呂川の年間河川空間利用者総数(推定)を以下に示す。

平成 12 年度の利用者数の推計は約 48 万人で、沿川市町村人口から見た年間利用回数は約 3.7 回である。

利用形態別では、スポーツ利用が約 47%を占め、最も多く、次いで散策等 46%、釣り 5%、水遊び 2%の割合であった。

利用場所別では、高水敷が 70%と最も多く、次いで堤防が 23%、水面が 4%、水際が 3%であった。

今後もスポーツや散策等を主体とした高水敷利用の活発な河川利用が期待される。

区分	項目	推定値 (万人)	平成12年度
			グラフ
利用形態別	スポーツ	23	 スポーツ 47% 散策等 46% 釣り 5% 水遊び 2%
	釣り	2	
	水遊び	1	
	散策等	22	
	合計	48	
利用場所別	水面	2	 高水敷 70% 堤防 23% 水面 4% 水際 3%
	水際	1	
	高水敷	34	
	堤防	11	
	合計	48	

7-1-2 高水敷の利用状況

高水敷は、洪水時以外は未使用であるよりも洪水流通時管理面で支障の生ずることがなく、かつ、河川の公共用物としての性格にあった利用がなされる場合は、河川にとって好ましいものである。オープンスペースの少ない都市部では、河川空間の存在は貴重であり、河川敷地の緑地化、公園化を推進し、積極的に開放、利用を図っている。利用状況は以下の通りである。

表 7-1 河川敷地の占用状況(直轄管理区間)(1)

河川敷地占用許可実態調査(1) [河川敷地利用状況]

(1)敷地占用に係るもの

網走開発建設部

常呂川水系

常呂川+無加川

占 用 目 的	件 数	面 積 (㎡)	備 考
公 園 ・ 緑 地	18	534,415.90	
運 動 場 (団 体 等)	5	246,621.19	
運 動 場 (私 人)	0	0.00	
運 動 場 (学 校)	0	0.00	
採 草 放 牧 地	119	1,903,865.52	
水 田	0	0.00	
畑	238	3,728,155.82	
ゴ ル フ 場	0	0.00	
自 動 車 練 習 場	1	35,478.50	
駐 車 場	0	0.00	
物 置 場	12	21,665.08	
水 産 物 干 場	0	0.00	
庭 園	6	573.99	
果 樹 園	0	0.00	
植 林 地	0	0.00	
船 置 場	0	0.00	
そ の 他 敷 地	1	2,976.00	
漁 業 等 水 面	0	0.00	
係 留 水 面	0	0.00	
計	400	6,473,752.00	

河川敷地占用許可実態調査(1) [河川敷地利用状況]

(2)工作物設置に係るもの

網走開発建設部

常呂川水系

常呂川+無加川

占 用 目 的	件 数	面 積 (㎡)	備 考
住 宅	8	777.34	
倉 庫 ・ 物 置 等	14	2,095.13	
橋 梁	54	86,715.30	
道 路	83	409,368.27	
鉄 道	2	26,515.24	
電 柱	46	26,788.24	
支 線 ・ 支 柱	50	153.00	
H 柱	4	14.00	
鉄 塔	2	796.68	
電 線 架 空 横 断	69	50,821.79	
橋 梁 添 架	57	12,766.13	
架 空 横 断 工 作 物	1	0.46	
埋 設 物	110	10,851.15	
水 路	39	66,265.71	
貯 水 ・ 係 留 施 設	2	5,463.39	
樋 門 ・ 樋 管	9	3,388.90	
そ の 他 工 作 物 (建 物)	0	0.00	
そ の 他 工 作 物 (建 物 以 外)	39	2,162.51	
計	589	704,943.24	
合 計	989	7,178,695.24	

表 7-2 河川敷地の占用状況(直轄管理区間)(2)

河川敷地占用許可実態調査(1) [河川敷地利用状況]

(1)敷地占用に係るもの

網走開発建設部

常呂川水系

常呂川

占 用 目 的	件 数	面 積 (㎡)	備 考
公 園 ・ 緑 地	17	533,943.51	
運 動 場 (団 体 等)	3	160,772.31	
運 動 場 (私 人)	0	0.00	
運 動 場 (学 校)	0	0.00	
採 草 放 牧 地	119	1,903,865.52	
水 田	0	0.00	
畑	238	3,728,155.82	
ゴ ル フ 場	0	0.00	
自 動 車 練 習 場	1	35,478.50	
駐 車 場	0	0.00	
物 置 場	12	21,665.08	
水 産 物 干 場	0	0.00	
庭 園	6	573.99	
果 樹 園	0	0.00	
植 林 地	0	0.00	
船 置 場	0	0.00	
そ の 他 敷 地	0	0.00	
漁 業 等 水 面	0	0.00	
係 留 水 面	0	0.00	
計	396	6,384,454.73	

河川敷地占用許可実態調査(1) [河川敷地利用状況]

(2)工作物設置に係るもの

網走開発建設部

常呂川水系

常呂川

占 用 目 的	件 数	面 積 (㎡)	備 考
住 宅	8	777.34	
倉 庫 ・ 物 置 等	14	2,095.13	
橋 梁	47	71,568.78	
道 路	74	364,219.28	
鉄 道	2	26,515.24	
電 柱	44	26,785.24	
支 線 ・ 支 柱	49	147.00	
H 柱	4	14.00	
鉄 塔	2	796.68	
電 線 架 空 横 断	67	47,032.09	
橋 梁 添 架	46	10,962.90	
架 空 横 断 工 作 物	1	0.46	
埋 設 物	88	9,822.63	
水 路	38	66,258.50	
貯 水 ・ 係 留 施 設	2	5,463.39	
樋 門 ・ 樋 管	8	3,004.12	
そ の 他 工 作 物 (建 物)	0	0.00	
そ の 他 工 作 物 (建 物 以 外)	32	1,942.37	
計	526	637,405.15	
合 計	922	7,021,859.88	

表 7-3 河川敷地の占用状況(直轄管理区間)(3)

河川敷地占用許可実態調査(1) [河川敷地利用状況]

(1)敷地占用に係るもの

網走開発建設部

常呂川水系

無加川

占 用 目 的	件 数	面 積 (㎡)	備 考
公 園 ・ 緑 地	1	472.39	
運 動 場 (団 体 等)	2	85,848.88	
運 動 場 (私 人)	0	0.00	
運 動 場 (学 校)	0	0.00	
採 草 放 牧 地	0	0.00	
水 田	0	0.00	
畑	0	0.00	
ゴ ル フ 場	0	0.00	
自 動 車 練 習 場	0	0.00	
駐 車 場	0	0.00	
物 置 場	0	0.00	
水 産 物 干 場	0	0.00	
庭 園	0	0.00	
果 樹 園	0	0.00	
植 林 地	0	0.00	
船 置 場	0	0.00	
そ の 他 敷 地	1	2,976.00	
漁 業 等 水 面	0	0.00	
係 留 水 面	0	0.00	
計	4	89,297.27	

河川敷地占用許可実態調査(1) [河川敷地利用状況]

(2)工作物設置に係るもの

網走開発建設部

常呂川水系

無加川

占 用 目 的	件 数	面 積 (㎡)	備 考
住 宅	0	0.00	
倉 庫 ・ 物 置 等	0	0.00	
橋 梁	7	15,146.52	
道 路	9	45,148.99	
鉄 道	0	0.00	
電 柱	2	3.00	
支 線 ・ 支 柱	1	6.00	
H 柱	0	0.00	
鉄 塔	0	0.00	
電 線 架 空 横 断	2	3,789.70	
橋 梁 添 架	11	1,803.23	
架 空 横 断 工 作 物	0	0.00	
埋 設 物	22	1,028.52	
水 路	1	7.21	
貯 水 ・ 係 留 施 設	0	0.00	
樋 門 ・ 樋 管	1	384.78	
そ の 他 工 作 物 (建 物)	0	0.00	
そ の 他 工 作 物 (建 物 以 外)	7	220.14	
計	63	67,538.09	
合 計	67	156,835.36	

7-2 河川の利用状況

常呂川は、広大な河川空間を有しており、特に河川敷地は水面及び背後地の諸条件により、その地域のニーズに適応した利用がなされている。

常呂川下流部から中流域にかけての高水敷は耕地として利用され、市街地周辺では野球、サッカー、テニスなどのスポーツやパークゴルフ、散策などのレクリエーションの場として利用されている。また、北見市、訓子府町、置戸町では桜づつみが整備されている。

また、「おけと湖水釣り大会」、「おけと湖水まつり」、「訓子府ふるさとまつり」、「協栄ダム・わかさぎ釣り大会」など四季を通じて様々なイベント会場として利用されている。



常呂川ハーブ公園(北見市)



常呂川香りゃんせ公園(北見市)



常呂川河川敷(訓子府町)



桜づつみ(北見市)

8. 河道特性

常呂川は、その源を北海道^{ところ}常呂郡^{おけと}置戸町三国山(標高 1,541m)に発し山間部を流下し、置戸町^{かつやま}勝山において、仁居常呂川を合わせ置戸町、訓子府町^{くんのつぷ}を経て、北見市内において無加川^{むか}を合わせ、北見盆地を貫流し、狭窄部を流下し^{にころ}仁頃川を合わせ、常呂平野を経てオホーツク海に注ぐ、幹川流路延長 120km、流域面積 1,930km²の一級河川である。

1) 源流部 (三国山～置戸市街部)

三国山から置戸市街部に至る源流部は、河床勾配が約 1/30～1/150 の山間地を流れる溪流で、エゾマツ、トドマツ等の針葉樹林が広く分布し、フクドジョウ、エゾイワナ等が生息している。

2) 上流部 (置戸市街～無加川合流点)

置戸市街から無加川合流点に至る上流部は、河床勾配は約 1/150～1/300 であり、サケ、サクラマス、カラフトマス、シベリアヤツメ、ヤチウグイ等が生息し、サケの産卵床が数多く確認されている。鳥類ではオシドリ、オオジシギ等が生息している。河川周辺の山付林には、ハルニレ、ミズナラが比較的多くみられ、高水敷にはエゾノキヌヤナギを主体とするヤナギ群落や、クサヨシ、ヨシ等の群落が分布している。また、無加川合流点付近の中ノ島公園にはハルニレ大径木林があり、地域のシンボルになっている。

3) 中流部 (無加川合流点～仁頃川合流点)

無加川合流点から仁頃川合流点付近に至るまでの中流部は、北見市街地を貫流し、河床勾配は約 1/300～1/600 の川幅が広く礫の中州や寄り州がみられる瀬・淵の明瞭な区間である。シベリアヤツメ、エゾウグイ等が生息し、サケの産卵床が点在する。また、忠志橋にはイワツバメの集団生息地が見られる。河川空間は主に農地として利用され、広い畑地帯に調和した河川景観を形成している。北見市街に接するところでは香りゃんせ公園等の公園やグラウンドとして利用されている。

4) 下流部 (仁頃川合流点～河口)

仁頃川合流点付近から河口に至るまでの下流部は、河床勾配は約 1/1,400～1/5,000 と緩やかで、低水路が大きく蛇行しており、ワンドや瀬・淵等多様な環境がみられ、魚類等の良好な生息環境となっている。この区間上流は左右交互に山付き区間が現れる流れの緩やかな区間であり、所々に寄り州が見られるが、低水路は安定し、エゾウグイ等が生息している。発達したハルニレ林等が山付き区間の所々に見られる。河岸にはオオイタドリ、クサヨシ等の草本や、エゾノキヌヤナギ等の木本が繁茂している。高水敷は広く畑地に利用されている。区間下流の感潮域には、シラウオ等汽水域に生息する魚類の生息地になっている。河口左岸の砂丘地には、ハマニンニクが小群落を形成している。

5) 河口部

河口部は蛇行が多く、人工池、河跡湖等の止水域も多く分布しているため、オジロワシ等の渡り鳥の中継地や、水鳥の集団分布地になっている。

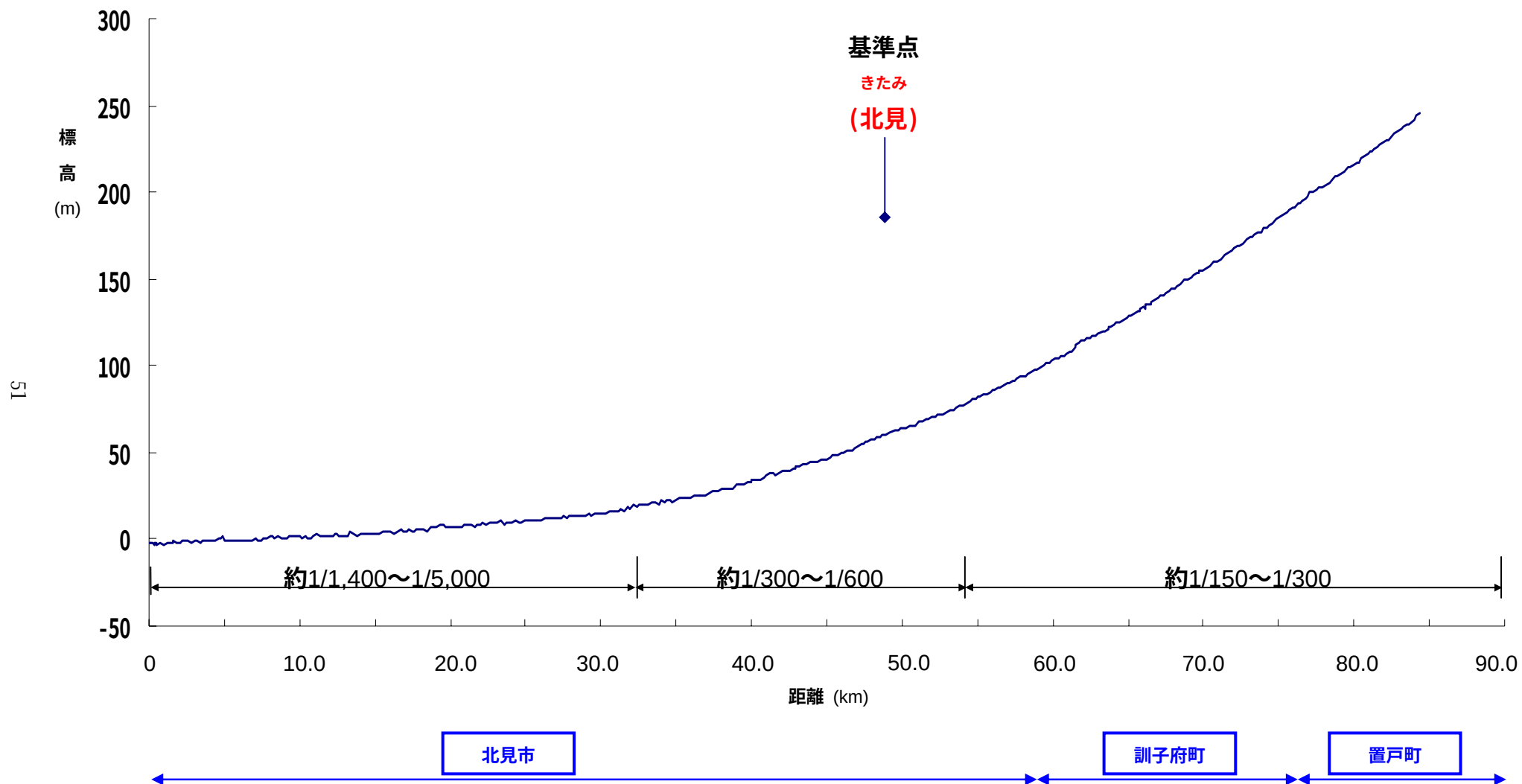


図 8-1 常呂川水系 常呂川 河床高縦断図

9.河川管理の現状

9-1 河川管理施設

常呂川における河川管理施設等の整備状況は下記の通りである。

9-1-1 堤防

堤防整備の現状(平成 17 年 3 月末現在)は下記の通りである。

表 9-1 常呂川水系堤防整備状況

項目	延長 (km)
完 成 堤 防	122.40 (90.6%)
暫 定 堤 防	6.62 (4.9%)
未 施 行 区 間	6.09 (4.5%)
堤防不必要区間	45.49
計	180.60

※ 延長は直轄管理区間の左右岸の計である。

9-1-2 洪水調節施設

完成施設：鹿ノ子ダム

9-2 砂利採取

常呂川においては、今までに砂利採取は行われていない。

9-3-1 河川情報の概要

9-3-2 水防警報の概要

9-3-3 洪水予報

凡 例	
	流 域 界
	市 町 村 界
	鉄 道 (JR線)
	国 道
	大 臣 管 理 区 間
	水 位 流 量 観 測 所
	雨 量 観 測 所

53

9-4 危機管理への取り組み

9-4-1 水防連絡協議会との連携

洪水・高潮等による被害発生防止または軽減を行うため、国及び地方自治体の関係機関が連携し、住民の避難、水防活動等を迅速かつ円滑に行うための水防連絡協議会が結成されている。この協議会により、重要水防箇所の合同巡視、水防団、水防資材の整備状況の把握、定期的な水防訓練等を行っている。

9-4-2 水質事故対策の実施

油類や有害物質が河川に流出する水質事故は、流域内に生息する魚類や生態系のみならず、水利用者にも多大な被害を与えている。水質事故が発生した場合、その被害を最小限にとどめるため、迅速で適切な対応が必要になっている。このため、環境保全連絡協議会により、連絡体制を強化すると共に、水質事故訓練等を行ったり、水質事故に備え、常時から資機材の備蓄を行っている。

9-4-3 洪水危機管理の取り組み

洪水危機管理に於いて、平常時から危機管理に対する意識の形成を図ると共に、洪水発生時の被害を最小限に抑えるため、浸水想定区域図を公表すると共に水防計画・避難計画の策定の支援、土地利用計画との調整を関係機関や地域住民等と連携して推進している。

9-5 地域との連携

常呂川流域では、常呂川に沿って町が連なっており、常呂川を中心に各地域間での街づくりの連携が進められている。

流域内では、常呂川治水促進期成会が設置され、北海道開発局網走開発建設部が主体となり、今後の川のあるべき姿や、川づくりのあり方について、関係河川使用者、地元漁業者、学識経験者、関係行政機関等との意見交換が行われている。

一方、今後、流域のまちづくり事業と連携し、河川を地域レクリエーション、防災、まちづくりの拠点として位置付け、地域と一体となった河川管理を行うことが必要とされている。地域住民と協力して河川管理を進めるためには、インターネット等のメディアを利用する等して、様々な河川情報を発信すると共に、地域からの河川整備に対する要望等を集約し、住民参加型の管理体制を構築する必要がある。また、河川清掃や、節水・水の再利用等を通じて、地域住民の河川に対する愛護精神を啓発していくことも重要である。

